

訳註『念佛圓通』

前言

今日、近代日中の間で浄土教の論争が行われていたことを知る人は少ないと思う。清代末期の居士仏教の代表者楊仁山（文会）と、日本の小栗栖香頂・龍舟の間でおよそ三年に渉って繰り広げられた。今はその経緯について述べることはできないが、特に小栗栖香頂の『念佛圓通』を中心に楊仁山の『評小栗栖念仏圓通』（以下『評念仏圓通』と略）そして、龍舟の『念佛圓通統紹』の翻刻と訳註を試みようと思う。特に『念

訳註『念佛圓通』

中村 薫
飯田 真宏
伊奈 潔
市野 智行

仏圓通』と『念佛圓通統紹』の翻刻は、近年陳継東博士の『清末仏教の研究』の中に所収されているもののみである。幸いにわれわれは大谷大学図書館所蔵の写本を手にすることを得た。そこで二年ほどかけて輪読を進めてきた。『念佛圓通』の翻訳を飯田真宏、『念佛圓通統紹』の翻訳を伊奈潔、訳註を市野智行がそれぞれ担当した。そして総合的な校正は中村薫が担当した。二編の本文の中には草書で走り書きしてあるところもあり、難解な部分もあったが、何とか上梓することができた。

中国浄土教と日本の浄土真宗の間には埋めがたい溝があることは事実

である。しかし、改めて、楊仁山の指摘を受けることによって、われわれは親鸞の教えを教団の殻の中に閉じこめてはいないかということが問われてくる。「浄土真宗の教えが大乘の至極」であるならば、われわれは中国浄土教の論駁に対して、今一度謙虚に耳を傾けていくべきではなからうか。その一点において、善導・法然・親鸞によって伝承されてきた本願念仏の教えが、より一層明晰になってくるのではなからうか。そこに楊仁山、小栗栖香頂、龍舟の仏教を求める真摯な姿勢が伺われるのである。

今回こうした機会を与えていただいた仏教文化研究所の小島恵昭、渡邊信和両先生には、ここからお礼申し上げたいと思う。若い学徒の研究故に、不備な点が多だあると思われるが、それは今後の課題としたい。

合掌

二〇〇八年十二月二十二日

代表 中村 薫

凡例

一、本文は、小栗栖香頂『念佛圓通』を基とし、それに対して批判を述べる、楊仁山『評念佛圓通』、並びに『評念佛圓通』に対して批判を述べる、竜舟『念佛圓通統紹』の三本を翻刻し、会本形式で編集したものである。それぞれの著作の文章の冒頭には、その著作名を太字で記した。なお写本の『念佛圓通統紹』の『評念佛圓通』の文は重複するので省略した。

二、本文の翻刻に当たり、次の通りにした。

①『念佛圓通』は大谷大学図書館所蔵の写本『念仏圓通』（『真宗教旨』『陽駁陰資辨全』との合本、奥書に「明治三十二年五月三十日起草 六月七日卒業」とある。真宗高倉学寮罫紙、両面二十四行・四十七枚、和綴じ、立て二十七センチ横十七センチ）を底本とした。

②『評念佛圓通』は『念佛圓通』の底本とした写本の上段の白紙の部分に書き込まれていたものを基にした。

また、『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷に収録されている『評念佛圓通』を参考にし、大谷大学所蔵の写本には無い文章を註に載せた。

③『念仏圓通統紹』は大谷大学図書館所蔵の写本（奥書に「明治三十四年十月、日本京都大谷本願寺大学寮掛錫飛州釋龍舟（俗姓内記）」

訳註『念佛圓通』

頓首」とある）を底本にした。

三、本文は上段に原文を載せ、下段に編集した書き下し文を載せた。また、『真宗聖教全書』に収録されている『選擇集』などの著作からの引用文を書き下す際には、『真宗聖教全書』の送り仮名などを参考にした。また、訳文の中に付してある数字は註記の番号で、末尾にまとめて出した。

四、本文は原則として、出来得る限り、写本に使われる漢字をそのまま使用した。結果、文章中には旧漢字と常用漢字が入り混じることになったが、以上の理由により、敢えて統一しなかった。

五、本文中の〈 〉内のは、原文にある割註である。また、（ ）内の西暦年号は、編集の途中で付け加えたものである。

六、訳文の中で、書名には『 』、引文には「 」を用いた。

七、訳文の中で、特に重要と思われる言葉には「 」で括った。例えば「選択」「十念」など。

八、『大正新脩大藏經』↓『大正』『真宗聖教全書』↓『真聖全』『法然上人伝全集』↓『法伝全』

念佛圓通

『念佛圓通』

清儒楊仁山、與書南條文雄、以選擇集及真宗教旨、爲違經旨曰。夫菩提心爲往生正因。今欲往生淨土而唱言捨菩提心。是南轅而北其轍也。又曰。若相違則不得謂之釋迦教。即謂之黑谷教矣。又曰。以世法論之。五伯之子孫、豈不能學三王。三王之子孫、豈不能學二帝。以出世法論之。聲聞之門徒、豈不能學緣覺。緣覺之門徒、豈不能學菩薩。此理不待辨而明矣。必守成法而不許變通、則地球各國亦不能有維新之氣象矣。又曰。三時有互攝之義。于末法內亦攝正像。是在根器不同。亦因時無實法耳。又曰。西方淨土佛力所成。順佛意則往生易。違佛意則往生難。又曰。鄙人護持正法、過于身命故。不避忌諱冒昧陳言。已上、舉其大要耳。

案楊居士護持正法過乎身命。我輩可不感謝哉。而其視我選擇集及真宗教旨、精而細。其心中所疑者、逐條筆之、無復餘力。我輩豈可不致我誠而應其需乎。試開四門辨之。

第一、舉源空上人小傳。世以上人爲大勢至菩薩化身。

清儒楊仁山（一八三七～一九二一）、書を南條文雄^①（一八四九～一九二七）に與へ、『選擇集』及び『真宗教旨』を以て、經旨に違ふと爲して曰はく。「夫れ、菩提心は往生の正因と爲す。今、淨土に往生せんと欲し、而も菩提心を捨つると唱言す。是れ轍を南して、其の轍を北するなり^②」と。又、曰はく。「若し相違すれば、則ち之れ釋迦教と謂ふことを得ざれ。即ち之れ黑谷教と謂ふ^④」と。又、曰はく。「世法を以て之れを論ずれば、五伯^⑤の子孫、豈に三王^⑥を學ぶこと能はざらんや。三王の子孫、豈に二帝^⑦を學ぶこと能はざらんや。出世の法を以て之れを論ずれば、聲聞の門徒、豈に緣覺を學ぶこと能はざらんや。緣覺の門徒、豈に菩薩を學ぶこと能はざらんや。此の理、辨を待たずして明らかなり。必ず成法を守りて變通を許さざれば、則ち地球各國も亦、維新の氣象有ること能はず^⑧」と。又、曰はく。「三時に互攝の義有り。末法の内に亦、正・像を攝す。是れ根器の不同に在り。亦時に因りて實法無きのみ^⑨」と。又、曰はく。「西方淨土は佛力の成ずる所、佛意に順ずれば則ち往生は易し。佛意に違はば則ち往生は難し^⑩」と。又、曰はく、「鄙人の正法を護持すること、身命に過ぎたるが故に。忌諱を避けず、冒昧に陳言す^⑪」と。已上、其の大要を舉ぐるのみ。

案するに楊居士、正法を護持すること身命に過ぐ。我輩、感謝せざるべけんや。而るに其れ、我が『選擇集』及び『真宗教旨』を視るに、精にして細なり。其の心中の疑ふ

故命此解以念佛圓通。

『評小栗栖念佛圓通』

勢至念佛都攝六根。源空專主口念、意根且不攝。遑及眼耳鼻身乎。以圓通目之、恐不称也。

『念佛圓通統紹』

按空師念佛、固主口念。然口念亦非不由心意。而起者、故二行章〈選擇集。已下曰某章者、皆選擇集也〉引善導疏曰。衆生起行口常稱佛、々即聞之。身常礼敬佛、々即見之。心常念佛、々即知之。衆生憶念佛者。佛憶念衆生。彼此三業不相捨離、故名親縁。楞嚴云。若衆生心憶佛念佛、現前當来必定見佛。此云憶佛者、意根所動也。云念佛者、舌根所現也。而舌根念佛能攝六根。此之謂圓通焉。則栖師辯空師之書、題以圓通、何妨。

所は、條を逐ひて之れに筆し、復た餘力無し。我輩、豈に我が誠にして其の需に應ずるを致さざるべけんや。試に四門を開きて之れを辨ず。

第一に、源空（一一三三～一二二二）上人の小傳を擧ぐ。世は上人を以て大勢至菩薩の化身と為す。故に此の解を命ずるに、念佛圓通を以てす。

勢至の念佛は都て六根を攝す¹²。源空は専ら口念を主とし、意根すら且つ攝せず。遑、眼・耳・鼻・身に及ぶや。圓通を以て之れを目す、恐らくは称へざるなり。

按ずるに、空師の念佛は、固より口念を主とす。然るに口念も亦、心意に由らざるに非らず。而るに起とは、故に「二行章」〈『選擇集』、已下「某章」と云ふは皆『選擇集』なり〉に善導の『疏』を引きて曰はく。「衆生、起行して口に常に佛を稱すれば、佛即ち之れを聞きたまふ。身に常に佛を礼敬すれば、佛即ち之れを見たまふ。心に常に佛を念ずれば、佛即ち之れを知りたまふ。衆生、佛を憶念すれば、佛も衆生を憶念したまふ。彼此の三業相ひ捨離せず。故に親縁と名づくるなり¹³」と。『楞嚴』に云はく。「若し衆生、心に佛を憶し、佛を念ずれば、現前當来し、必ず定めて佛を見む¹⁴」と。此に「憶佛」と云ふは、意根の所動なり。「念佛」と云ふは、舌根の所現なり。而るに、舌根の念佛は、能く六根を攝す。此に之れ圓通と謂ふ。則ち栖師は空師の書を辯じ、題するに圓通を以

てす、何ぞ妨ぐるや。

『念佛圓通』

第二、示選擇本願為宗。

第三、明菩提心差別。見此二門則足知非南轅北轍、又非黑谷教矣。五伯之比況不倫矣。五伯三乘之喻、取從劣進勝也。本宗以念佛為大乘無上之法。勢不可降喬入幽也。曇鸞捨三論歸念佛。道綽闍涅槃入淨土。江漢秋陽不可復加焉。源空上人去天台入弘願。是不守成法而能變者。望居士之豹變於淨土易行矣。念劫融即、一即一切、是約理也。若約事則不得不踐三時之規則也。

『評小栗栖念佛圓通』

閱至此處及恍然曰。我過矣。我過矣。彼直欲駕佛經、而上之立義三藏教典以外。而我方以尊崇佛語相期。豈不令人嗤笑哉。

第二に、選擇本願を宗と為すことを示す。

第三に、菩提心の差別を明かす。此の二門を見れば、則ち南轅北轍に非らず、又、黒谷教に非らざることを知るに足る。五伯の比況は倫ならず。五伯三乗の喩は劣従り勝に進むを取るなり。本宗は念佛を以て大乘無上の法と為す。勢、喬を降り幽に入るべからず。曇鸞（四七六―五四二）は三論を捨て念佛に歸す。道綽（五六二―六四五）は涅槃を闍きて淨土に入る。江漢秋陽¹⁵、復た加ふべからず。源空上人は天台を去りて弘願に入る。是れ成法を守らずして能変せる者なり。望むらくは、居士の淨土易行に豹變せんことを。念劫融即、一即一切、是れ理に約するなり。若し事に約すれば則ち、三時の規則を踐せざるを得ざるなり。

閱して此處に至り、恍然に及びて曰はく。我れ過れり。我れ過れり。彼、直に佛經に駕さんと欲し、而して之れに上げて義を三藏教典以外に立つ。而れども我れ方に佛語を尊崇するを以て相期す。豈に人をして嗤笑せしめざらんや。

『念佛圓通統貂』

按空師祖述三經一論、既見於其首教相章。何敢於三藏教典以外、立其義乎。但其微旨未達高懷。故有此言。再思則幸。

『念佛圓通』

餘至第四科隨難別解。而後吐露一片之赤心。請奉諒之。

四門分別

- 一、舉源空上人小傳。
- 二、示選擇本願為宗。
- 三、辨菩提心差別。
- 四、隨難別解。

按するに、空師祖述の三經一論、既に其の首の「教相章」に見えたり。¹⁶何ぞ敢へて三藏教典以外に、其の義を立てんや。但だ其の微旨なるに未だ高懷に達せず。故に此の言有り。再び思はば則ち幸なり。

餘は第四科に至りて、難に随ひ別解す。而して後に一片の赤心を吐露す。請ひ奉る、之れを諒とせよ。

- 一、源空上人の小傳を舉ぐ。
- 二、選擇本願を宗と為すことを示す。
- 三、菩提心の差別を辨ず。
- 四、難に随ひ別解す。

一、舉源空上人小傳

『念佛圓通』

第一、舉源空上人小傳者、上人父時國、母秦氏。夢吞剃刀而有孕。

『評小栗栖念佛圓通』

夢吞剃刀。即是割斷聖道之兆也。

『念佛圓通統紹』

按栖師此傳太略。故意或不通。具傳云。父母患無子、祈佛神者久矣。一夜母秦氏夢吞剃刀、而如有妊者乃告之父。父曰。所妊必男子。長而出家為一朝之戒師。出家之後朝野歸仰。果如其言、高倉後鳥羽二帝、上西修明二后以下禮師受圓戒。

第一に源空上人の小傳を舉ぐとは、上人の父は時國、母は秦氏。夢に剃刀を吞みて孕むこと有り。¹⁷⁾

夢に剃刀を吞む。即ち是れ聖道を割斷するの兆なり。

按ずるに、栖師、此の傳を太だ略す。故に意或ひは通せず。具さには傳に云はく。「父母は子の無きを患ひ、佛神に祈すること久し。一夜、母秦氏、夢に剃刀を吞み、而も妊らむこと有るが如し。乃ち之れを父に告げたり。父曰はく。「妊める所、必ず男子なり。長じて出家し、一朝の戒師と為るべし」と。出家の後、朝野歸仰す。果して其の言の如く、高倉（一一六一～一一八二）、後鳥羽（一一八〇～一二三九）の二帝、上西（一二六～一二八九）、修明（一二八二～一二六四）の二后以下、師を禮し圓戒を受けたり。

『念佛圓通』

長承二年四月七日、生於作州稻岡。頭圩而眼光。五歲、坐必向西、口必稱南無阿弥陀佛。保延七年、父時國為定明所殺。上人時九歲。放小箭射之、中其眉間。時人異之。菩提寺觀覺乞為弟子。聞一知十。覺送之叡山源光曰。進上大聖文殊像一軀。光送之皇圓。時年十五。薙髮受戒。十六歲、學三大部。

久安六年十八歲、從黑谷叡空、稟密乘及大乘律。凡大藏經律論、他宗章疏、無不該通。法相藏俊、華嚴慶雅、皆嘆其所造詣焉。

暗夜見書無燈而室明。信空見之而驚。曾讀華嚴、大龍現青蛇之形。又修法華三昧、白象現場。

上人在黑谷。閱大藏五遍、視善導四部〔般舟讚未來〕之書前後八遍。至散善義一心專念之文、豁然有得曰。弥陀法王、為我選定此念佛之大行矣。是為開宗之權輿。時承安五年四十三歲也。從是去黑谷移吉水、日称名六萬遍。四方靡然歸之。

長承二年（一一三三）四月七日、作州稻岡に生まる。頭圩にして眼光あり。五歳にして、坐するに必ず西に向ひ、口に必ず南無阿弥陀佛と稱す。保延七年（一一四二）、父時國、定明の為に殺さる。上人、時に九歳なり。小箭を放ちて之れを射、其の眉間に中つ。時に人、之れを異とす。菩提寺の觀覺¹⁸（生没年不詳）に乞ひて弟子と為す。一を聞きて十を知る。覺、之れを叡山の源光¹⁹（生没年不詳）に送りて曰はく、「大聖文殊像一軀を進上す」と。光、之れを皇圓（生没年不詳）に送る。時に年十五なり。薙髮受戒す。十六歳にして、三大部を學ぶ。

久安六年（一一五〇）十八歳にして、黑谷の叡空²⁰（？～一一七九）従り、密乘及び大乘律を稟く。凡そ大藏經・律・論、他宗の章疏、該通せざるは無し。法相の藏俊²¹（一一〇四～一一八〇）、華嚴の慶雅²²（一一〇三～一一八五）、皆、其の造詣する所を嘆ず²³。

暗夜に書を見るに燈無くして室明るし。信空²⁴（一一四六～一二三八）、之れを見て驚く。曾て華嚴を読めば、大龍青蛇の形を現じ、又、法華三昧を修すれば、白象場に現はる²⁵。

上人、黑谷に在り。大藏を閲すること五遍、善導の四部『般舟讚』は未だ来らずの書を見ること前後八遍。「散善義」の「一心專念」の文に至りて、豁然として得ること有りて曰はく、「弥陀法王は我が為に此の念佛の大行を選定す」と。是れ開宗の權輿と為す。時に承安五年（一一七五）、四十三歳なり²⁷。是れ従り黑谷を去りて吉水に移り、日に称名すること六萬遍。四方靡然として、之れに歸す。

『評小栗栖念佛圖通』

猛利念佛亦恐涉於自力。

猛利の念佛も亦、恐らくは自力に涉れり。

『念佛圖通続貂』

按信之與行、由佛力而起。謂之他力。從凡心而生謂之自力。故六万唱名、回以為往生之業、則自力也。明信佛智而後唱之、則他力也。自力他力、但就其所以起而言之。空師固是明信佛智之人。何有涉于自力之嫌哉。

按ずるに、信は之れ行と與に、佛力に由て起くる。之れを他力と謂ふ。凡心従り生ずる。之れを自力と謂ふ。故に六万の名を唱へ、回して以て往生の業と為す。則ち自力なり。佛智を信ずることを明かして、後に之れを唱ふ。則ち他力なり。自力他力は但だ其の所以は起に就て之れを言ふ。空師は固より是れ明らかに佛智を信ずる人なり。何ぞ自力の嫌に涉ること有らんや。

『念佛圖通』

叡山顯眞、請上人說淨土教於龍禪寺。三論明遍、天台證眞、智海、法相貞慶、皆臻焉。上人、懇々切切說之。顯眞感泣、把香爐繞堂。三百餘人和而念佛者三日。後顯眞補天台座主。乃撰十二僧、創不斷念佛之法要。上人曾在靈山寺、三七日行不斷念佛。無燈而有光。大勢至菩薩介乎。大眾行道之間、衆奇之。

後白河法皇、勅上人說菩薩戒、並講往生要集。上人之

叡山の顯眞⁽²⁸⁾（一二三一、一九二）、上人に淨土教を龍禪寺に於いて説くことを請ふ。三論の明遍⁽²⁹⁾（一一四二、一二三四）、天台の證眞⁽³⁰⁾（生没年不詳）、智海⁽³¹⁾（？、一二三〇六）、法相の貞慶⁽³²⁾（一一五五、一二二三）、皆、臻る。上人、懇々切切と之れを説く。顯眞、感泣して、香爐を把りて堂を繞る。三百餘人、和して念佛する者三日なり。後に顯眞、天台座主に補す。乃ち十二僧を撰びて不斷念佛の法要を創む⁽³³⁾。上人、曾て靈山寺に在り。三七日、不斷念佛を行ず。燈無くして光有り。大勢至菩薩の介くるか。大眾行道の間、衆、之れを奇とす⁽³⁴⁾。

誦夫往生極樂之教行濁世末代之目足。道俗貴賤誰不歸者之文。音吐清越、深入心肝。君臣上下、悲喜並臻。法皇勅隆信寫上人之真、藏之於蓮華王院。

攝政関白大政大臣兼實、深歸上人。後雍髮號月輪圓照。乞上人作選擇集。選擇集之作、應兼實之乞也。元久二年四月一日、上人說法於月輪殿。其歸兼實拜之地。上人之頭現圓光、中有寶瓶。兼實驚喜、以知其勢至之化。自此舉國益歸上人。

『評小栗栖念佛圓通』

今而後方知釋迦教外、別有勢至之教。流傳人間、深自愧其見聞之不廣也。

『念佛圓通統紹』

按高見以空師為違經。故有斯說。幸了微旨、則必無斯言。亦不敢辯。

後白河法皇（一二七〇～一二九二）、上人に勅して、菩薩戒を説かしめ、並びに『往生要集』を講ぜしむ。上人の誦は、「夫れ、往生極樂の教行は濁世末代の目足なり。道俗貴賤、誰か歸せざる者あらん」の文なり。音吐は清越にして、深く心肝に入る。君臣上下、悲喜並び臻る。法皇、隆信（生没年不詳）に勅して上人の真を寫さしめ、之れを蓮華王院に藏す。³⁶⁾

攝政関白大政大臣兼實（一二四九～一二〇七）、深く上人に歸す。後に雍髮して月輪圓照と號す。上人に乞ひて『選擇集』を作らしむ。『選擇集』の作は、兼實の乞ひに應ずるなり。³⁷⁾元久二年（一二〇五）四月一日、上人、月輪殿に於いて說法す。其の歸りに兼實、之れ地に拜す。上人の頭に圓光を現じ、中に寶瓶有り。兼實、驚喜喜び、以て其の勢至の化なることを知りぬ。此れ自り國を擧げて、益ます上人に歸す。³⁸⁾

今より而る後、方に知りぬ、釋迦の教の外に別して勢至の教有り。流傳する人間、深く自ら其の見聞の廣まらざるを愧ずるなり。

按ずるに、高見は空師を以て違經と為す。故に斯の説有り。幸ひに微旨を了すれば、則ち必ず斯の言無し。亦敢へて辯ぜず。

『念佛圓通』

建久九年正月二日、水想觀成矣。七日、瑠璃地現。二月、水想地想、寶樹・寶池・宮殿皆現。正治二年二月、地想等五觀、隨意皆現。元久三年正月四日、弥陀觀音勢至現。五日又現。余案非是入定而得之。称名念佛之力。自然感此好相也。

『評小栗栖念佛圓通』

余案下二十餘字、恐其涉于雜修雜行。所以作此出脱之語。而稱名念佛仍不免自力也。

『念佛圓通統貂』

按空師自記三昧發得記一篇、猶存于漢語燈錄中。〈漢語燈錄一書、空師漢文法彙也〉中曰。建久九年正月朔。予赴法橋教慶之請。〈法橋東國僧位〉歸菴之後七日依例別時念佛。初日光明少現。〈中略〉七日復瑠璃地現。〈中略〉顧我平生課念佛六万遍。不退勤修。由此今此等相現歟。栖師語本於此。乃示空師之德業耳。何為雜行雜修

建久九年（一一九八）正月二日、水想觀を成ぜり。七日、瑠璃地現ぜり。二月、水想・地想・寶樹・寶池・宮殿、皆現ぜり。正治二年（一二〇〇）二月、地想等の五觀、意に隨ひて皆現ぜり。元久三年（一二〇六）正月四日、弥陀・觀音・勢至、現ぜり。五日、又現ぜり。⁴⁰余、案ずるに、是れ入定して之れを得るに非らず。称名念佛の力なり。自然に此の好相を感じるなり。

「余案」より下の二十餘字、恐らくは其れ雜修雜行に渉る。所以に此れ出脱の言を作す。而るに稱名念佛も仍ほ自力を免れざるなり。

按ずるに、空師自ら『三昧發得記』の一篇を記す。猶ほ『漢語燈錄』の中に存するがごとし。『漢語燈錄』一書は空師の漢文の法彙なり。中に曰はく。「建久九年（一一九八）正月朔、予、法橋教慶の請に赴く。〈法橋〉は東國の僧位。歸菴の後七日、例に依りて別時念佛す。初日に、光明少しき現ず。〈中略〉七日に復た瑠璃地現ず。〈中略〉顧ふに我れ平生に念佛六万遍を課し、不退に勤修す。此に由て今此等の相、現ずるか」と。⁴¹栖師の語は本、此に於いてなり。乃ち空師の德業を示すのみ。何ぞ雜行雜修と為し、逃避の地

作逃避之地耶。抑難行者、以非浄土之諸行、回為往生之業者也。難修者、混修助正二業、以為往生之因也。苟信佛智順佛願。知佛恩之後、則讀誦固所當務也。觀察亦所當修也。禮拜稱名讚嘆供養、皆所當行也。於是乎善導有五正行之說焉。但明信与不了、順与不順、知恩与不知恩、此自他力之辨也。高見著於此、則宗意將迎刃矣。

『念佛圓通』

建永二年三月、竄讃州。蓋揭南北之讒、居五年得赦。

建曆二年正月、在大谷得疾。見佛菩薩真身二十五日寂。

紫雲降焉。年八十、臘六十六。

『評小栗栖念佛圓通』

假如有佛現於空中、放光說法。倘不與脩多羅合、亦不足信也。

を作さんや。抑も難行は、浄土の諸行に非らざるを以て、回して往生の業と為すなり。難修は、助正二業を混修し、以て往生の因と為すなり。苟も佛智を信じ、佛願に順じ、佛恩を知るの後、則ち讀誦は固より當に務むべき所なり。觀察も亦、當に修すべき所なり。禮拜、稱名、讚嘆、供養も皆當に行すべき所なり。是に於いて、善導の五正行の説有り。但だ、明信と不了、順と不順、知恩と不知恩、此れ自・他力の辯なるのみ。高見の著は此に於いて、宗意に則するか、將た刃を迎ふるか。

建永二年（二二〇七）三月、讃州に竄せらる。蓋し南北の讒を掲る、居すること五年、赦を得たり。

建曆二年（二二二二）正月、大谷に在りて疾を得る。佛・菩薩の真身を見て、二十五日寂す。紫雲降る。年八十、臘六十六なり。⁴²

假如ひ佛、空中に現じて、放光し說法すること有るも、倘ほ修多羅と合はずんば、亦、信ずるに足らざるなり。

『念佛圓通統貂』

按鄙見亦如此。若空師之見、實闡金口之微、則從之不可可乎。

『念佛圓通』

上人之閱一代教、非貪博學之名也。單探出離之要路也。其去黑谷而移吉水、在以其所得之要路、而自利利他耳。曰。真言止觀三論法相之教、道幽理邃。利智聰明之者可以行焉。方今暗於三密而登遍照之位、乏於戒律而居持律之職。是謂虛假。虛假非以可出離也。末代衆生、唯有念佛往生之一耳。

『評小栗栖念佛圓通』

將來親見勢至、當問此事。若真勢至化身、仍須切實辨論、過於此番之言百千萬倍。請弥陀釋迦并十方諸佛證明。

按ずるに、鄙見も亦此の如し。若し空師の見、實に金口の微より闡けば、則ち之に従て、亦可ならずや。

上人の一代教を閲するに、博學の名を貪るに非らず。單に出離の要路を探るのみ。其れ黒谷を去り吉水に移るは、其の得る所の要路を以て、自利利他するに在るのみ。曰はく。「真言止觀・三論法相の教、道幽にして理邃し。利智聰明の者は以て行ずべし。方に今、三密に暗くして而も遍照の位に登り、戒律に乏しくして持律の職に居す。是れ虚假と謂ふ。虚假を以て出離すべきに非らざるなり。末代の衆生、唯だ念佛往生の一有るのみ」と。

將來、親しく勢至を見れば、當に此の事を問ふべし。若し真に勢至の化身ならば、仍ほ須く切實に辨論すること、此番の言に過ぎて百千萬倍なるべし。弥陀・釋迦、并に十方諸佛の證明を請ふ。

『念佛圓通統貂』

按祖師曰。弥陀本願誠在、則釋迦說教不可虛言。佛說苟真、則善導之釋不可虛言。善導之釋既真、則法然之言何虛乎。具然。弥陀釋迦勢至、必證空師之說無疑。雖然此種事、余輩不好辯繙朱也。

二、示選擇本願為宗

『念佛圓通』

本宗立三願三經三機三往生之判。三願者十八十九二十也。三經者大經觀經弥陀經也。以第十八願為真實。以十九二十為方便。開第十八願者為大經、故以大經為真實教。開十九願者為觀經、故以觀經為方便。開第二十願者為小經、故以小經為方便也。

第十八願、單以三信十念為往生因、是為真實。第十九願、以發菩提心等諸行為往生因、是為方便。第二十願、單以念佛為往生因、然係自力念佛、故為方便也。

訳註『念佛圓通』

按ずるに祖師⁽⁴⁴⁾（一七三、二六二）曰はく。「弥陀の本願誠に在しまさば、則ち釈迦の説教、虚言なるべからず。佛説苟真にましまさば、則ち善導の釋、虚言したまふべからず。善導の釋既に真ならば、則ち法然の言何ぞ虚ならんや⁽⁴⁵⁾」と。具さに然り。弥陀・釈迦・勢至、必ず空師の説に疑ひ無きことを証す。然りと雖も此の種の事、余輩は繙朱を辯ずることを好まず。

本宗は三願・三經・三機・三往生の判を立つ。三願とは十八・十九・二十なり。三經とは『大經』・『觀經』・『弥陀經』なり。第十八願を以て真實と為す。十九・二十を以て方便と為す。第十八願を開くを『大經』と為す、故に『大經』を以て真實教と為す。十九願を開くを『觀經』と為す、故に『觀經』を以て方便と為す。第二十願を開くを『小經』と為す、故に『小經』を以て方便と為すなり。

第十八願は、單に三信十念⁽⁴⁶⁾を以て往生の因と為し、是れを真實と為す。第十九願は、發菩提心等の諸行を以て往生の因と為し、是れを方便と為す。第二十願は、單に念佛を以て往生の因と為す。然れども自力の念佛に係る、故に方便と為すなり。

何以知第十八願為真實。曰。依善導也。定善義曰。如無量壽經四十八願中、唯明專念弥陀名號得生。法事讃上〈十六左〉曰。弘誓多門四十八、偏標念佛最為親。人能念佛還念。專念想佛佛知人。念佛必得親近增上之三縁。說此念佛為本願中之王。第十八願是也。

『評小栗栖念佛圓通』

佛還念及專念想佛等語可見。善導以念字通於心口。貴宗判定屬口稱。亦不合善導意也。

『念佛圓通統紹』

按此等念字固屬意業。但本願之十念。古師以觀心解之。善導獨以十聲釋之。易行之微始頭。本宗主張在焉。

『念佛圓通』

問。第十八願如何。曰。設我得佛十方衆生、至心信樂欲生我國、乃至十念。若不生者不取正覺。但以三心十念

何を以て第十八願を真實と為すことを知るか。曰はく。善導に依るなり。「定善義」に曰はく。『無量壽經』の四十八願の中の如き、唯だ弥陀の名號を專念して、生を得ると明かす⁴⁷⁾と。『法事讃』上〈十六左〉に曰はく。「弘誓多門にして四十八なれども、偏に念佛を標して最も親しと為す。人能く佛を念すれば、佛還て念じたまふ。專念に佛を想へば、佛、人を知めしたまふ⁴⁸⁾と。念佛は必ず親・近・増上の三縁を得る。此の念佛、本願中の王と為すを説く。第十八願、是れなり。

「佛還念」及び「專念想佛」等の語を見るべし。善導は「念」字を以て心・口に通ず。貴宗の判定は口稱に屬す。亦、善導の意に合はざるなり。

按ずるに、此等「念」の字は、固より意業に属す。但だし本願の十念、古師は觀る心を以て之を解す。善導獨り十聲を以て之を釈す。易行之微始む頭れ、本宗の主張在り。

問ふ。第十八願とは如何。曰はく。「設ひ我れ佛を得んに、十方衆生、心を至し信樂して我が國に生まれんと欲ひて、乃至十念せん。若し生まれずんば正覺を取らじ⁴⁹⁾と。

為生因、不取餘行也。

問。單曰十念、不知其心念語念。何以知其為口称念佛哉。

答。據善導也。觀念法門曰。若我成佛、十方衆生、願生我國。称我名字下至十聲。乘我願力若不生者、不取正覺。以十聲称名釋乃至十念。是掃雲霧而見晴天者。

往生禮讚曰。若我成佛、十方衆生称我名號、下至十聲。若不生者、不取正覺。彼佛今現在成佛。當知本誓重願不虛。衆生称念必得往生。是亦以十聲称名、釋乃至十念。十念之非心念意念者、皎如白日。

『評小栗栖念佛圓通』

稱名本在念佛之内。若執定念佛必局於稱名、則於經意不貫。

『念佛圓通統紹』

按四種念佛、近出圭峰行願疏中。弟亦知之。然獨以称

訳註『念佛圓通』

但だ三心十念を以て生因と為し、餘行を取らざるなり。

問ふ。單に十念と曰ひ、其の心念・語念を知らず。何を以てか、其の口称の念佛と為すことを知るや。

答ふ。善導に據るなり。『觀念法門』に曰はく。「若し我れ成佛せんに、十方の衆生、我が國に生まれんと願はん。我が名字を称へること、下十聲に至る。我が願力に乘して若し生まれずんば、正覺を取らじ」と。十聲の称名を以て、「乃至十念」を釋す。是れ雲霧を掃きて、晴天を見るなり。

『往生禮讚』に曰はく。「若し我れ成佛せんに、十方の衆生、我が名號を称せんこと、下十聲に至るまで、若し生れずんば正覺を取らじ。彼の佛、今現に在まして成佛したまへり。當に知るべし、本誓重願虚しからざることを。衆生、称念すれば必ず往生を得ん」と。是れも亦、十聲の称名を以て、「乃至十念」を釋す。十念の心念・意念に非らざるは、皎として白日の如し。

稱名は本、念佛の内に在り。若し定めて念佛は必ず稱名に局ると執すれば、則ち經の意は貫かず。

按ずるに、四種念佛は、近く圭峰⁽⁸²⁾（七八〇〜八四一）の『行願疏』の中に出たり。弟、

名一行、選為往生之正業者、我弥陀五劫所思惟也。善導之楷定在焉。

『評小栗栖念仏圓通』

此段願文須查考梵本。若原文仍屬意業即不得。從善導改作口業。譯師最為慎重、不許任意竄改也。

『念佛圓通統紹』

按竺土法運不振者久矣。大乘經典多付虬宮。所存只小乘之一部耳。痛哭何已。近載三五貝葉、雖出於壁中、大率與華譯諸本不合符節。未足信憑也。幸我兩邦五千卷猶存。吾輩欲窺先佛微意。捨此焉由。鄙見如此。高懷果何如。導師十念就稱名言之、但釋之耳。何改之乎。

『評小栗栖念仏圓通』

若口稱與心意無涉、則口稱佛名心念五欲。心口兩岐尚得入彌陀願海乎。偏邪之見至於此極、何足與辨。

亦之れを知る。然るに獨り称名一行を以て、選びて往生の正業と為すは、我が弥陀の五劫に思惟する所なり。善導の楷定在らんや。

此の段の願文、須く梵本を查考すべし。原文仍ち意業に屬すれば即ち得ざるが若し。善導従り改めて口業と作す。譯師、最も慎重を為す。任意の竄改を許さざるなり。

按ずるに、竺土の法運の振るはざること久し。大乘經典の多くは虬宮に付す。存する所は只だ小乗の一部のみ。痛哭、何ぞ已まん。近く三五の貝葉を載き、壁の中より出すと雖も、大率は華譯諸本と符節を合はさず。未だ信憑に足らざるなり。幸ひに我が兩邦、五千卷猶ほ存す。吾輩は先に佛の微意を窺はんと欲す。此れを捨て焉ぞ由らんや。鄙見は此の如し。高懷は果たして何如。導師の十念は稱名に就きて之れを言ひ、但だ之れを釋するのみ。何ぞ之れを改めんや。

若し口稱と心意と涉ること無ければ、則ち口に佛名を稱して心に五欲を念ぜん。心・口兩岐して、尚ほ弥陀の願海に入ることを得んや。偏邪の見、此の極に至る、何ぞ與に

『念佛圓通統紹』

按願曰。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。是此三心与十念二而一。有心而行生。猶水与波。本宗何謂口称与心意無相涉乎。十念与三心對。故善導以称釋之曰十聲。然非口称實離心意而猶存也。念字心口相涉。聲字重在口業上。是故單言十声。則有口称離心意而獨存之嫌。故以十念譯之。是必譯者所三致意也。既言十念。後人解以為觀想觀像之念。則失易行之所以為易。背弥陀五劫思惟之本意未可知也。故以聲釋之。亦善導之所致意也。二者相得願意愈昭。本宗之見如此。幸諒焉。

『念佛圓通』

第十八願、單取念佛為生因。故不得以餘行往生焉。餘行者定散諸善也。

問曰。何以知餘行非本願。

訳註『念佛圓通』

辨ずるに足らんや。

按ずるに、願に曰はく。「至心信樂欲生我國。乃至十念。若不生者不取正覺」と。是れは此れ、三心と十念と、二にして一なり。心有りて行は生ず。猶ほ水と波のごとし。本宗は何ぞ口称と心意と、相ひ涉ること無しと謂はんや。十念と三心と對す。故に善導は「称」を以て之を釋し、「十聲」と曰ふ。然るに口称は實に心意を離れて、猶ほ存するに非らざるなり。「念」字は心口に相ひ涉る。「聲」字は重ねて口業の上に在り。是の故に單に「十聲」と言ふ。則ち口称の心意を離れて獨り之に存すること有るを嫌ふ。故に「十念」を以て之を譯す。是れ必ず譯さば、三の致意する所なり。既に「十念」と言ふ。後人は解するに以て觀想・觀像の念と為す。則ち易行の易為る所以を失ふ。弥陀の五劫思惟の本意に背くも、未だ知るべからざるなり。故に「聲」を以て之を釋す。亦善導の致意する所なり。二者相ひ得て、願意愈よ昭らかなり。本宗の見、此の如し。幸ひに諒せんや。

第十八願は單に念佛を取りて生因と為す。故に餘行を以て往生を得ず。餘行とは定散諸善なり。

問ふて曰はく。何を以て餘行の本願に非らざることを知るや。

答。據善導也。散善義曰。上來雖說定散兩門之益、望佛本願、意在衆生一向專称弥陀佛名。定散非本願也。單以一向称名為本願。非本願之行、不許往生。

散善義曰。一心專念弥陀名號、行住坐臥、不問時節久近。念念不捨者、是名正定之業。順彼佛願故。順本願者得往生。不順本願者不得也。本願唯選取乎念佛之一行為正因。不許餘行之廻向也。

問。弥陀選擇之相如何。

答。大經曰。具足五劫思惟、攝取莊嚴佛國清淨之行。

大阿弥陀經曰。曇摩迦便一其心、即得天眼徹視。自見二百一十億諸佛國土中、諸天人民之善惡、國土之好醜、即選擇心中所願。便結得是二十四願經。攝取之與選擇其意一也。捨其麤惡、取其善妙。捨其難行、取其易行。四十八願中、攝取其易行生因者、為第十八願。故攝末歸本、目第十八願為選擇本願。

問。弥陀因位選取易行為生因之相如何。

答。諸佛國土中、有以布施為往生行。有以持戒為往生行。有以忍辱精進禪定智慧為往生行。或以菩提心為生因。或以六念為生因。或以持經持咒為生因。或以起立塔像飯食沙門孝養父母奉事師長為生因。或以称名為生因。菩薩因位選捨六度等行、而唯選取称名之一行。是為選擇。

答ふ。善導に據るなり。「散善義」に曰はく。「上來、定散兩門の益を説くと雖も、佛の本願の意を望まんには、衆生をして、一向に専ら弥陀佛の名を称するに在り」と。定散は本願に非らざるなり。單に一向称名を以て本願と為す。本願の行に非らずんば、往生を許さず。

「散善義」に曰はく。「一心に弥陀の名號を專念して、行住坐臥・時節の久近を問はず。念念に捨てざる者は、是れを正定の業と名づく。彼の佛願に順ずるが故に」と。本願に順ずる者は、往生を得る。本願に順ぜざる者は、得ざるなり。本願は唯だ念佛の一行を選取して正因と為す。餘行の廻向を許さざるなり。

問ふ。弥陀選擇の相とは如何。

答ふ。『大經』に曰はく。「五劫を具足して、莊嚴佛國の清淨の行を思惟し攝取せり」と。『大阿弥陀經』に曰はく。「曇摩迦は便ち其の心を一にして、即ち天眼を得て徹視して、悉く自ら二百一十億の諸佛の國土の中の諸天・人民の善惡、國土の好醜を見て、即ち心中の所願を選択して、便ち是の二十四願經を結得す」と。攝取は之れ選擇と其の意は一なり。其の麤惡を捨て、其の善妙を取る。其の難行を捨て、其の易行を取る。四十八願の中、其の易行の生因を攝取するとは、第十八願と為す。故に末を攝して本に歸し、第十八願を目けて選擇本願と為す。

問ふ。弥陀の因位に易行を選取して生因と為すの相は如何。

答ふ。諸佛國土の中、布施を以て往生の行と為す有り。持戒を以て往生の行と為す有り。忍辱・精進・禪定・智慧を以て往生の行と為す有り。或ひは菩提心を以て生因と為す。或ひは六念を以て生因と為す。或ひは持經・持咒を以て生因と為す。或ひは起立塔像・飯食沙門・孝養父母・奉事師長を以て生因と為す。或ひは称名を以て生因と為す。

問。何故選取念佛一行。

答。餘行是劣、念佛是勝。名號是萬德之所歸。又曰。

餘行是難、念佛是易。男女貴賤行住坐臥、修之不難。

本宗廢餘行而獨取念佛、據上來之義也。

三ノ一、辨菩提心差別

『念佛圓通』

問。選擇集廢菩提心。而和語燈取之、如何。

答。廢之據善導、取之據曇鸞。

問。善導廢菩提心、如何。

答。本宗以第十九願為方便。以其取菩提心等行也。此十九之成就為三輩。三輩皆舉菩提心。十九之菩提心自力、則三輩之菩提心亦自力也。不可以自力行往生他力淨土也。故善導廢之。開十九為觀經、以十九為方便。則觀經亦方便也。三輩九品開合之異、三輩菩提心自力、則九品菩提心亦自力也。散善有二。一者三福、二者九品。此三福九

菩薩是因位に六度等の行を選捨て、唯だ称名の一行を選取す。是れ選擇と為す。

問ふ。何故、念佛の一行を選取るか。

答ふ。「餘行は是れ劣、念佛は是れ勝なり。名號は是れ萬德の歸する所なり」と。⁽⁸⁸⁾又曰はく。「餘行は是れ難、念佛は是れ易なり。男女貴賤、行住坐臥に、之れを修するに難からず」と。⁽⁸⁹⁾

本宗の餘行を廢して獨り念佛を取ること、上來の義に據るなり。

問ふ。『選擇集』は菩提心を廢す。而れども、『和語燈』は之れを取るは如何。⁽⁹⁰⁾

答ふ。之れを廢するは善導に據り、之れを取るは曇鸞に據る。

問ふ。善導は菩提心を廢するとは如何。

答ふ。本宗は第十九願を以て方便と為す。其の菩提心等の行を取るを以てなり。此の十九の成就を三輩と為す。三輩は皆、菩提心を舉ぐ。十九の菩提心は自力なれば、則ち三輩の菩提心も亦、自力なり。自力の行を以て他力の淨土に往生すべからず。故に善導は之れを廢す。十九を開くを觀經と為し、十九を以て方便と為す。則ち觀經も亦、方便なり。三輩・九品は開合の異、三輩の菩提心自力なれば、則ち九品の菩提心も亦、自力なり。散善に二有り。一は三福、二は九品。此の三福・九品も亦、開合の異、九品の菩

品亦開合之異。九品菩提心自力、則三福菩提心亦自力也。三福者世戒行也。行福中有發菩提心。上下品有發无上道心。十九三輩三福九品一切屬散善之行。非本願之行、故善導廢之。曰。上來雖說定散兩門之益、望佛本願、意在衆生一向專称弥陀佛名。称名是本願之行故。選擇集定散非本願之行故廢之。〔集恐焉誤〕選擇集之廢據此善導。

『評小栗栖念佛圓通』

善導實無廢菩提心之語、真宗強指其廢菩提心。借疏末一句、用之費盡無限心力、亦可哀也。

『念佛圓通統紹』

按廢菩提心、疏中實無其語。然何無其義乎。散善義末節、明廢定散兩門立念佛一行。其定善者乃十三觀也。散善者三福九品也。而發菩提心在其行福中。則菩提心非所廢而何乎。高眼唯見定散之文在前。而繁廢立之說在後而約也。遂有斯說。幸於全疏行文之斡旋。再注其眼焉。

提心自力なれば、則ち三福の菩提心も亦、自力なり。三福とは世戒行なり。行福中に發菩提心有り。上下品に發无上道心有り。十九・三輩・三福・九品の一切、散善の行に屬す。本願の行に非らず、故に善導は之れを廢す。曰はく。「上來、定散兩門の益を説くと雖も、佛の本願の意を望まんには、衆生をして一向に専ら弥陀佛の名を称するに在り」と。称名は是れ本願の行なるが故に。『選擇集』は、定散は本願の行に非らざるが故に之れを廢す。〔集〕は恐らく「焉」の誤り〔選擇集〕の廢するは此れ善導に據るなり。

善導、實に菩提心を廢するの語無し、真宗は強に其の菩提心を廢するを指す。『疏』末の一句を借り、之れを用ひて無限の心力を費し盡す、亦哀れむべきなり。

按ずるに、菩提心を廢するとは、『疏』の中、實には其の語無し。然れども何ぞ其の義無からんや。「散善義」の末節に、明らかに定散兩門を廢し、念佛一行を立つ。其の定善とは乃ち十三觀なり。散善とは三福・九品なり。而れば發菩提心は、其の行福の中に在り。則ち菩提心は廢する所に非らずして何んや。高眼は唯だ定散の文の前に在るを見るのみ。而るに廢立の說は後に在りて繁し、而れども約するなり。遂に斯の說有り。幸ひに全『疏』の行文、之れ斡旋す。再び其の眼を注せよ。

『念佛圓通』

自力菩提心有多種。天台有四教菩提心、藏通別圓是也。真言有三種菩提心、勝義行願三摩地是也。華嚴三論法相各有菩提心。

蓋四弘誓願有二種。一緣事、二緣理。緣事者、一衆生無邊誓願度、二煩惱無邊誓願斷、三法門無盡誓願知、四無上菩提誓願證。二緣理者、一切諸法本來寂靜、非有非無、非常非斷、不生不滅、不垢不淨。一色一香無非中道。生死即涅槃、煩惱即菩提。翻一一塵勞門即是八萬四千諸波羅蜜、但一念心普皆具足如如意珠。非有寶非無寶、若謂無者即妄語、若謂有者即邪見。不可以心知、不可以言辨。普於法界一切衆生、起大慈悲興四弘誓。是名順理菩提心也。已上拔出往生要集。

末代凡夫、豈得發此菩提心哉。弥陀因位捨之、據其難也。

『評小栗栖念佛圓通』

謂觀經之定散、大經之三輩、不順佛願是謗釋迦。謂彌陀因位捨菩提心、是謗弥陀。吾不知栖君是何等人也。

訳註『念佛圓通』

自力の菩提心に多種有り。天台に四教の菩提心有り、藏・通・別・圓、是れなり。真言に三種の菩提心有り、勝義・行願・三摩地、是れなり。華嚴・三論・法相、各おの菩提心有り。

蓋し四弘誓願に二種有り。一に緣事、二に緣理なり。緣事とは、一に衆生無邊誓願度、二に煩惱無邊誓願斷、三に法門無盡誓願知、四に無上菩提誓願證なり。二に緣理とは、一切諸法は本來寂靜にして、非有非無、非常非斷、不生不滅、不垢不淨なり。一色一香も中道に非らざること無し。生死即涅槃、煩惱即菩提なり。一一の塵勞の門を翻せば、即ち是れ八萬四千の諸波羅蜜、但だ一念の心に普く皆具足すること、如意珠の如し。有寶に非らず、無寶に非らず。若し無と謂はば即ち妄語、若し有と謂はば即ち邪見なり。心を以て知るべからず、言を以て辨ずるべからず。法界に普き一切衆生、大慈悲を起し四弘誓を興す。是れ順理菩提心と名づくるなり。已上、『往生要集』を拔出す。^(註)

末代の凡夫、豈に此の菩提心を發すことを得んや。弥陀の因位に之れを捨つるは、其の難に據るなり。

謂はく、『觀經』の定散、『大經』の三輩、佛願に順ぜざるとは是れ釋迦を謗るなり。謂はく、「弥陀は因位に菩提心を捨つる」とは是れ弥陀を謗るなり。吾れ栖君の是れ何

等の人かを知らざるなり。⁽⁶³⁾

『念佛圓通統貂』

按玄義序題云。娑婆化主因其請故。即廣開淨土之要門。安樂能人顯彰別意之弘願。其要門者即此觀經定散二門是也。〈中略〉言弘願者、如大經說。據此則釋迦於觀經正所說者、定散二門也。弘願者弥陀第十八本願也。謂定散不順佛願者、觀經之定散、與弥陀第十八本願不相應也。釋迦與弥陀自別。何謗釋迦哉。又弥陀因位捨之云者。我等下劣難發大心至大果。弥陀久遠照而能知之。故大悲外已發願修行、令我等不發大菩提心、不修聖道之行、唯順佛願發信心、而得生彼土至大菩提。此之謂捨。栖師語太簡。故有謗弥陀之疑。幸諒焉。

『念佛圓通』

序分義〈三十一左〉曰。三發菩提心者、此明衆生忻心趣大。不可淺發小因、自非廣發弘心、何能得與菩提相會。唯願我身身同虛空心齊法界、盡衆生性。我以身業恭

按ずるに、「玄義」の序題に云はく、「娑婆の化主、其の請に因るが故に。即ち広く淨土の要門を開く。安樂の能人は別意の弘願を顯彰す。其の要門とは即ち此の『觀經』の定散二門是れなり。〈中略〉弘願と言ふは『大經』の説の如し⁽⁶⁴⁾」と。此れに據れば、則ち釋迦の『觀經』に於いて正に説く所は定散二門なり。弘願とは弥陀第十八の本願なり。定散は佛願に順ぜずと謂ふは、『觀經』の定散と、弥陀の第十八本願とは相應せざるなり。釋迦と弥陀と自ずと別なり。何ぞ釋迦を謗らんや。又、弥陀是因位に之れを捨つると云ふは、我等は下劣にして大心を發し、大果に至ること難し。弥陀は久遠より照らして能く之れを知る。故に大悲の外に已に發願修行し、我等をして大菩提心を發さしめず、聖道の行を修めしめず、唯だ佛願に順じて信心を發さしめ、彼の土に生まれることを得て、大菩提に至らしむ。此は之れ捨と謂ふなり。栖師の語は太だ簡なり。故に弥陀を謗るの疑ひ有り。幸ひに諒せんや。

「序分義」〈三十一左〉に曰はく。「三に發菩提心とは此れ衆生の忻心、大に趣くことを明す。淺く小因を發すべからず。廣く弘心を發すに非らざる自りは、何ぞ能く菩提と相會することを得ん。唯だ願はくば、我が身、身は虚空に同じく、心は法界に齊しく、

敬供養禮拜迎送來去、運度令盡。又我以口業、讚嘆說法皆受我化。言下得道者令盡。又我以意業、入定觀察分身法界、應機而度無一不盡。我發此願、運運增長猶如虛空。無所不遍行流無盡、徹窮後際、身無疲倦、心無厭足。又言菩提者、即是佛果之名。又言心者、即衆生能求之心。故云發菩提心也。

『評小栗栖念佛圓通』

此是善導所說、何得判其廢菩提心。

『念佛圓通統紹』

按善導此文、正釋觀經三福中行福。而示菩提心之相者。栖師為示菩提心之難而引之。勿執以謂善導不廢菩提心焉。若以疏末一節反照、則明是所廢中之物也。

衆生の性を盡さん。我れ身業を以て恭敬し、供養し、禮拜して來去を迎送し、運度して盡さしめん。又、我れ口業を以て、讚嘆し、說法して、皆我が化を受けしめ、言下に道を得ん者をして盡さしめん。又、我れ意業を以て入定觀察し、身を法界に分け機に應じて度し、一として盡さざること無けん。我れ此の願を發す、運運增長して猶ほし虚空の如く、所として遍ぜざること無く、行流無盡にして、後際を徹窮し、身に疲倦無く、心に厭足無からん。又、菩提と言ふは、即ち是れ佛果の名なり。又、心と言ふは即ち衆生能求の心なり。故に發菩提心と云ふなり」と。

此は是れ、善導の所說なり。何ぞ其れ菩提心を廢すると判ずることを得んや。

按ずるに、善導の此の文は、正しく『觀經』三福の中の行福を釋す。而るに菩提心の相を示すとは、栖師は菩提心の難を示す為に之れを引けり。善導は菩提心を廢さずと謂ふを以て執する勿かれ。若し『疏』末の一節を以て反て照らさば、則ち是れ廢する所の中の物を明かすなり。

『念佛圓通』

如是菩提心、亂想凡夫、豈能發得哉。

是の如き菩提心、亂想の凡夫、豈に能く發し得んや。

『評小栗栖念仏圓通』

凡夫定是凡夫。攝歸淨土如何化導。蓋凡夫之本心與諸佛無二無別。所以蒙佛接引、即脫輪回之苦也。

凡夫は定では凡夫なり。淨土に攝歸して如何が化導せん。蓋し凡夫の本心と諸佛と、二無く別なること無し。所以に佛の接引を蒙れば、即ち輪回の苦を脱するなり。

『念佛圓通統貂』

按悉有佛性孰有異辭。所謂菩提心、由自力而發之。唯難焉云耳。何云不可發乎。唯其難矣。故不可不由他力而發之。生彼土而至大菩提也。栖師曰。豈能發得乎。語有與奪。函丈求其意而可。

按ずるに、悉有佛性は孰か異辭有らんや。所謂菩提心は自力に由て之れを發す。唯だ難と云ふのみ。何ぞ發すべからずと云はんや。唯だ其れ難なり。故に他力に由らずして之れを發すべからず。彼の土に生まれ大菩提に至るなり。栖師曰はく。「豈に能く發し得んや」と。語の與奪有り、函丈の其の意を求めて可なり。

『念佛圓通』

問。若不發願者不得往生歟。

問ふ。若し發願せずんば往生を得ざるか。

答。古來有二義。淨影天台慈恩等、不許無發心而往生也。曰。九品往生、皆發菩提心。其中品人、本雖是小乘、

答ふ。古來、二義有り。淨影（五二三～五九二）、天台（五三八～五九七）、慈恩（六三二～六八二）等、發心無くして往生することを許さざるなり。曰はく。「九品往生、皆菩

後發大心得生彼國。由彼本習、暫證小果。其下品人雖退大心、而其勢力猶在得生。

此義出於淨影觀經疏末（二十一紙）。中品小乘者約初後。發大心者約臨終。雖臨終發大心、依其本習暫證小果後入大乘也。下三品觀經不說發大心。淨影以為退大心也。

一義許無發大心而往生。玄義分以上品為遇大凡夫。以中品為遇小。以下品為遇惡。中品遇小之機、豈發大心乎。況下品惡人、唯知作惡單有依佛力得往生耳。要集曰。中下品但由福分生。上品具福分道分。福分者餘行也。中攝念佛。道分者無上菩提心也。憬興龍興之意亦同之。

三ノ二、二雙四重菩提心

『念佛圓通』

源空上人之寂、在建曆二年正月二十五日。越十一月二十三日、華嚴宗高山寺明慧、作摧邪輪及莊嚴記、大駁選

訳註『念佛圓通』

提心を發す。其の中品の人、本は是れ小乗と雖も、後に大心を發し彼の國に生ずることを得る。彼は本習に由り、暫く小果を證す。其の下品の人、大心を退すと雖も、而れども其の勢力猶ほ在りて生ずることを得る」と。

此の義、淨影の『觀經疏』末（二十一紙）に出づる。中品の小乗は初後に約す。大心を發すは臨終に約す。臨終に大心を發すと雖も、其の本習に依り暫く小果を證し、後に大乘に入るなり。下三品は『觀經』は大心を發することを説かず。淨影は以て大心を退すと為すなり。

一義は大心を發すること無くして往生することを許す。「玄義分」は上品を以て大に遇ふ凡夫と為す。中品を以て小に遇ふと為す。下品を以て惡に遇ふと為す。中品は小に遇ふの機、豈に大心を發さんや。況んや下品の惡人、唯だ惡を作すことを知るのみにして、單に佛力に依りて往生を得ること有るのみをや。『要集』に曰はく。「中下品は但だ福分に由りて生ず。上品は福分・道分を具ふ」と。福分とは餘行なり。中に念佛を攝す。道分とは無上菩提心なり。憬興⁽⁶⁹⁾（生没年不詳）、龍興⁽⁷⁰⁾（生没年不詳）の意も亦之れに同じ。

源空上人の寂、建曆二年（一二二二）正月二十五日に在り。越して十一月二十三日、華嚴宗の高山寺明慧（一二七三〜一二三三）、『摧邪輪』及び『莊嚴記』を作して、大ひに

擇集。甚於居士之論選擇集數等。而古人之辨其訛謬者、久矣。

一言以辨之、彼知有自力菩提心。而不知有他力菩提心也。選擇集之廢、廢自力菩提心也。和語燈之立、立他力菩提心也。栴尾高辨、唯視選擇集不觀和燈。誤以上人為廢一切菩提心也。

見真大師立二雙四重菩提心。高辨若見之、應謝罪於源空上人之墓。

問。二雙四重如何。

答。一者豎出、法相三論歷劫迂廻之苦提心也。二者豎超、華天密禪即心即佛之苦提心也。此二重為自力聖道菩提心矣。三者横出、十九願之自力菩提心也。四者横超、十八願他力廻向之信樂也。豎者自力、横者他力、出者迂廻、超者頓證也。三論法相自力歷劫故為豎出。華天密禪自力頓證故為豎超。十九願自力菩提心生乎化土、深自悔責轉入真土、故為横出。十八之信樂順次往生證大涅槃、故為横超。

此中選擇集之所廢、在豎出豎超及横出之苦提心也。和語燈之所立、在横超他力之大菩提心也。

『選擇集』を駁す。居士の『選擇集』を論ずる甚しきこと、數等し。而れども古人の其の訛謬を辨ずるは久し。

一言以てこれを辨ずれば、彼は自力の菩提心有るを知る。而れども他力の菩提心有るを知らざるなり。『選擇集』の「廢」は、自力の菩提心を廢するなり。『和語燈』の「立」は、他力の菩提心を立つるなり。栴尾の高辨、唯だ『選擇集』を視るのみにして、『和燈』を觀ず。誤て上人を以て一切の菩提心を廢すると為すなり。

見真大師は二雙四重の菩提心を立つ。高辨、若し之れを見れば、應に源空上人の墓に謝罪すべし。

問ふ。二雙四重とは如何。

答ふ。一には豎出、法相・三論の歷劫迂廻の菩提心なり。二には豎超、華・天・密・禪の即心即佛の菩提心なり。此の二重を自力聖道の菩提心と為す。三には横出、十九願の自力の菩提心なり。四には横超、十八願他力廻向の信樂なり。「豎」は自力、「横」は他力、「出」とは迂廻、「超」とは頓證なり。三論・法相は自力歷劫の故に豎出と為す。華・天・密・禪は自力頓證の故に豎超と為す。十九願自力の菩提心は化土に生じ、深く自ら悔責して真土に轉入す、故に横出と為す。十八の信樂は順次に往生して大涅槃を證す、故に横超と為す。

此の中、『選擇集』の廢する所は、豎出・豎超、及び横出の菩提心に在るなり。『和語燈』の立つる所は、横超他力の大菩提心に在るなり。

『評小栗栖念佛圓通』

此判大違經意。經文第十八願普攝群機也。如法華之一稱南無佛、皆已成佛道者是也。第十九願別攝上品機也。今抑十九為化土、揚十八為直證涅槃。一切經內皆無此義。

『念佛圓通統貂』

按第十八願既曰十方衆生、固攝群機。然其十念以觀經下品相照。則專念弥陀一佛者也。與法華汎爾歸諸佛者自別。第十九願、為猶帶自力之情。不能信第十八願他力之義者說之。故令修諸功德、回以願往生。不必上品機也。乃所以報土中更分化土、他力中別開自力也。此義他經恐無之。乃弥陀別願所以超諸佛也。本經云。我建超世願。弥陀偈經曰。發願踰諸佛。誓二十四章。即是也。

『念佛圓通』

問。他力横超菩提心、據何經疏。

訳註『念佛圓通』

此の判、大ひに經の意に違ふ。『經』文の第十八願は普き群機を攝するなり。『法華』の「一たび南無佛と稱すれば皆已に佛道を成ずる」⁽¹⁾の如きは是れなり。第十九願は別して上品の機を攝するなり。今、十九を抑へて化土と爲し、十八を揚げて直に涅槃を證すると爲す。一切の經の内、皆此の義無し。

按ずるに、第十八願は既に「十方衆生」と曰ひ、固より群機を攝す。然るに其の十念は、『觀經』下品の相を以て照らす。則ち専ら弥陀一佛を念ずる者なり。法華と與に汎爾に諸佛に歸する者は、自ずから別なり。第十九願は、爲に猶ほ自力の情を帶す。第十八願他力の義を信する能はざる者に之を説くなり。故に諸の功德を修せしめ、回して以て往生を願ふ。必ずしも上品の機ならざるなり。乃ち、報土中に更に化土を分かち、他力中に別して自力を開く所以なり。此の義は他經には恐らく之れ無し。乃ち弥陀の別願の諸佛を越ゆる所以なり。本經は「我れ超世の願を建つ」⁽²⁾と云ひ、『弥陀偈經』は「發願諸佛を踰へて、二十四章を誓ふ」⁽³⁾と曰ふ。即ち是れなり。

問ふ。他力横超の菩提心、何の經疏に據るか。

答。據論註也。據大經也。論註下〈二十六左〉曰。三輩生中雖行有優劣、莫不皆發無上菩提之心。此無上菩提心、即是願作佛心。願作佛心即是度衆生心。度衆生心即攝取衆生、生有佛國土心。是故願生彼安樂淨土者、要發無上菩提心也。

『評小栗栖念仏圓通』

曇鸞之註、甚合經意。

『念佛圓通統紹』

按鸞師所謂菩提心。即橫超他力之菩提心也。而非豎出豎超自力聖道之菩提心也。此義栖師既辯矣。高見若看做自力聖道之菩提心。則非鸞師意也。亦非經意也。

『念佛圓通』

大經三輩、以黑谷見之、菩提心可廢。自力故。以玄忠見之、菩提心可立。他力故。黑谷以善導流通視之。故菩提心為散善行福之一、故廢之。玄忠以三輩為第十八願之

答ふ。『論註』に據るなり。『大經』に據るなり。『論註』下〈二十六左〉に曰はく。「三輩生の中に行に優劣有ると雖も、皆無上菩提の心を發せざるは莫し。此の無上菩提心といふは、即ち此れ願作佛心なり。願作佛心は即ち是れ度衆生心なり。度衆生心は即ち衆生を攝取して有佛の國土に生ぜしむる心なり。是の故に、彼の安樂淨土に生まれんと願する者は、要らず無上菩提心を發するなり」と。

曇鸞の註、甚だ經の意に合ふ。

按ずるに、鸞師の謂ふ所の菩提心とは、即ち橫超他力の菩提心なり。而れば豎出・豎超の自力聖道の菩提心に非らざるなり。此の義は栖師既に辯ず。高見は若し自力聖道の菩提心を看做すれば、則ち鸞師の意に非らざるなり。亦た經の意にも非らざるなり。

『大經』の三輩、黑谷を以て之れを見れば菩提心は廢すべし。自力の故に。玄忠を以て之れを見れば、菩提心は立つるべし。他力の故に。黑谷は善導の流通を以て之れを視る。故に菩提心は散善・行福の一と為す、故に之れを廢す。玄忠は三輩を以て第十八願

相、故取其菩提心與念佛、為往生之正因正業。正因者三心也。正業者十念也。既以為淨土之大菩提心。誰敢廢之二師、各據一義。並不相違。

『評小栗栖念仏圓通』

此中強辨、實無道理。

『念佛圓通』

已以菩提心、為報土之因。則高辨所引一切經菩提心為因之文、悉具於淨土菩提心之中焉。

故安樂集上〈六右〉華嚴經云、譬如有人用師子筋以為琴弦。音聲一奏、一切餘弦悉皆斷壞。若人菩提心中行念佛三昧者、一切煩惱一切諸障、悉皆斷滅。亦如有人搆取牛羊驢馬一切諸乳、置一器中。若持師子乳一滴投之、直過無難、一切諸乳悉皆破壞變為清水。若人但能菩提心中行念佛三昧者、一切惡魔諸障、直過無難。不遑詳記。又曰。凡欲往生淨土、要須發菩提心為源。菩提者無上佛道之名也。此心廣大遍周法界。此心究竟等若虛空。此心長遠盡未來際。

の相と為す、故に其の菩提心を念佛と與に取り、往生の正因・正業と為す。正因とは三心なり。正業とは十念なり。既に以て淨土の大菩提心と為す。誰か敢へて之の二師を廢し、各おの一義に據るか。並び相違せず。

此の中、強に辨するも實に道理無し。

已に菩提心を以て、報土の因と為す。則ち高辨所引の一切經の菩提心を因と為すの文は、悉く淨土の菩提心の中に具はる。

故に『安樂集』上〈六右〉、『華嚴經』に云はく。譬へば人有りて、師子の筋を用ひて以て琴の弦と為さんに、音聲一び奏するに、一切の餘の弦、悉く皆斷壞するが如し。若し人、菩提心の中に念佛三昧を行ずる者は、一切の煩惱、一切の諸障、悉く皆斷滅す。亦、人有りて、牛・羊・驢馬一切の諸の乳を搆し取りて、一器の中に置かんに、若し師子の乳一滴を持ちて之れを投いるに、直ちに過ぎて難り無し。一切の諸乳悉く皆破壞して變じて清水と為るが如し。若し人、但だ能く菩提心の中に念佛三昧を行ずれば、一切の惡魔諸障、直ちに過ぎて難り無し」と。詳記するに遑非らず。又曰はく。「凡そ淨土に往生せんと欲はば、要らず發菩提心を須ひるを源と為す、と。菩提は無上佛道の名なり。此の心、廣大にして法界に遍周せん。此の心、究竟して、等しきこと虚空の若し。

此の心、長遠にして未來際を盡す⁽¹⁶⁾と。

『評小栗栖念仏圓通』

此中所引、甚合道理。

此の中に引く所、甚だ道理に合ふ。

『念佛圓通』

他力廻向之心、得具此無量之功德也。高辨之切齒扼腕

罵黒谷者、却成謗法之大邪見耳。

他力廻向の心は、此の無量の功德を具ふことを得るなり。高辨の切齒扼腕して黒谷を罵るは、却て謗法の大邪見を成すのみ。

上來三門畢。

上來三門を畢る。

『評小栗栖念仏圓通』

黒谷之意、皆與二師不合。

黒谷の意、皆二師と合はず。

『念佛圓通統紹』

按菩提心語則雖一、義則不一。故不可無廢立也。高見渾然為一。故有強辨不合之難矣。抑三一諸宗菩提心不一之義、空師於付属章辯之。再閱則可。

按ずるに菩提心の語は則ち一と雖も、義は則ち一ならず。故に廢立を無しとすべからず。高見は渾然として一と為す。故に強に不合の難を辨すること有り。抑も三一の諸宗の菩提心不一の義、空師は「付属章」に之れを辯ず⁽¹⁷⁾。再び閱すれば則ち可なり。

第四、隨難別解 有二十一章

第一章

『念佛圓通』

居士曰。貴宗道友、惠贈七祖聖教、已將往生論註安樂集觀經疏刊板流行。頃承心泉大師屬刊全書。因逐一檢閱見得此集、與經意不合處頗多。略加評語。就正高明倘不以為然。請逐款駁詰可也。

解曰。居士已刊論註安樂集觀經疏。護法之志、利生之舉、我輩再拜謝居士之厚意。從今以後、貴地之法運、復於曇鸞道綽善導之古慶哉。

以選擇集為不合經意。已於前第二門第三門辨之。不再贅焉。居士之難、頗肖高辨。然高辨極其譏謗。居士之言從容不迫。不失其為仁人君子也。

均是一代經也。天台以之為五時八教。不可罵之為違教也。華嚴以之為五教十宗。不可罵之為違教也。法相以之為有空中三時教。不可罵之為違教也。真言以之為顯密二教十住心。不可罵之為違教也。道綽以之為聖道淨土、不

居士曰はく。「貴宗の道友、七祖聖教を惠贈し、已に『往生論註』『安樂集』『觀經疏』を將て刊板流行す。頃、心泉大師⁽⁷⁸⁾（一八五〇～一九〇五）より屬刊全書を承く。逐一檢閱するに因り、此の『集』を得て見るに、經の意と合はざる處頗る多し。略して評語を加ふ。就正高明なるも、倘に以て為然ならず。請ふ、款を逐ひ駁詰して可なり⁽⁷⁹⁾」と。

解して曰はく。居士は已に『論註』『安樂集』『觀經疏』を刊す。護法の志、利生の舉、我輩、再び居士の厚意を拜謝す。今從り以後、貴地の法運、曇鸞、道綽、善導の古を復す、慶ばしいかな。

『選擇集』を以て經の意に合はざると為す。已に前の第二門・第三門に於いて之れを辨ず。再贅せず。居士の難、頗る高辨に肖る。然るに高辨は其の譏謗を極む。居士の言、從容にして迫らず、其の仁人・君子と為すを失せざるなり。

均しく是れ一代の經なり。天台は之れを以て五時八教と為す。之れを罵り、教に違ふと為すべからず。華嚴は之れを以て五教十宗と為す。之れを罵り、教に違ふと為すべからず。法相は之れを以て有・空・中の三時教と為す。之れを罵り、教に違ふと為すべからず。真言は之れを以て顯密二教・十住心と為す。之れを罵り、教に違ふと為すべから

可罵之為違教也。

ず。道綽は之れを以て聖道・浄土と為す、之れを罵り、教に違ふと為すべからず。

『評小栗栖念仏圓通』

陽駁陰資辨第六紙已申明此意、茲不重出。

『陽駁陰資辨』第六紙に已に此の意を申し明かす。茲に重ねて出さず。

『念佛圓通』

均是觀經也。天台以之為心觀為宗、實相為體。不可罵之為違教也。善導以之為念佛觀佛為宗、往生浄土為體。不可罵之為違教也。本宗依善導。誰以善導為違教乎。好相感見之所證而一僧指授之所録、須尊信之如佛經也。

均しくは是れ『觀經』なり。天台は之れを以て心觀を為すを宗と為し、實相を體と為す⁸⁰。之れを罵り、教に違ふと為すべからず。善導は之れを以て念佛・觀佛を為すを宗と為し、往生浄土を體と為す⁸¹。之れを罵り、教に違ふと為すべからず。本宗は善導に依る。誰か善導を以て教に違ふと為すか。好相感見の證する所にして一僧指授の録する所、須く之れを尊信すること、佛の經の如くなるべし。

『評小栗栖念仏圓通』

以疏輔經、不以疏掩經、慎之。

『疏』を以て『經』を輔くるも、『疏』を以て『經』を掩はず。之れを慎むべし。

『念佛圓通統紹』

按本宗固以疏輔經。何以疏掩經乎。觀經本是指方立相

按ずるに、本宗は固より疏を以て經を輔く。何ぞ疏を以て經を掩はんや。『觀經』は

之教。以事為歸。與聖道諸經以理為歸者、其揆不一。抑天台以法華視觀經。以事入理。無乃以法華掩觀經乎。唯善導則以淨土視觀經。故毫髮無掩經意之累焉。乃所以楷定古今也。經意由善導而始顯焉。何掩之云乎。

第二章

『念佛圓通』

選擇集曰。道綽禪師立聖道淨土二門。而捨聖道、正歸淨土之文。

居士曰。此一捨字、龍樹道綽皆不說。說之則有病。蓋聖道與淨土一而二、二而一者也。

解曰。此捨一字、上之所以開淨土宗、於聖道各宗之外也。若除此一字、則本宗之教義埋沒於聖淨混淆、不明不了之際矣。以此一字、使天下萬世、知標準之所在也。

本よりはれ指方立相の教なり。事を以て歸と為す。聖道の諸經と與に理を以て歸と為すは、其の揆は一ならず。抑も天台は『法華』を以て『觀經』を視る。事を以て理に入る。乃ち『法華』を以て『觀經』を掩ふこと無からんや。唯だ善導のみ則ち淨土を以て『觀經』を視る。故に毫髮にも經意の累を掩ふこと無し。乃ち古今を楷定する所以なり。經意は善導に由て始めて顯なり。何ぞ之れを掩ふと云はんや。

『選擇集』に曰はく。「道綽禪師、聖道・淨土の二門を立てて、而も聖道を捨てて、正しく淨土に歸するの文」と。

居士曰はく。「此の一の「捨」の字、龍樹（二・三世紀）、道綽、皆説かず。之れを説けば則ち病有り。蓋ぞ聖道と淨土と一にして二、二にして一ならざらんや」と。

解して曰はく。此の「捨」の一字、上人の淨土宗を開く所以にして、聖道各宗の外に於いてのものなり。若し此の一字を除けば、則ち本宗の教義は聖と淨と混淆し、不明不了の際に埋没す。此の一字を以て、天下萬世をして、標準の所在を知らしむるなり。

『評小栗栖念仏圓通』

暗藏滅法之機。

暗に滅法の機を藏す。

『念佛圓通統紹』

按為廢立之說者。不啻淨教也。諸宗咸有焉。華嚴之五教、唯取圓教。天台之四教、先廢三教。慈恩之三時、貶前二時為不了義。設使空師廢捨字、藏滅法之機、則天台慈恩賢首亦滅法之嚆矢也。恐無此理。

按するに、廢立の説を為すは、啻だ淨教のみならず。諸宗は咸く有り。華嚴の五教は唯だ圓教を取るのみ。天台の四教は先に三教を廢す。慈恩の三時は前の二時を貶け、不了義と為す。設使ひ空師、「捨」の字を廢すれども、滅法の機を藏すれば、則ち天台、慈恩、賢首（六四三〜七二二）も亦、滅法の嚆矢なり。恐らく此の理無し。

『念佛圓通』

龍樹之判難易、時屬像之始、尚有能行難行。故聖道之傍明淨土耳。道綽之時屬末法之始、聖道難行不可行也。故斷斷乎捨之。

龍樹の難易を判するに、時は像の始に屬す、尚ほ能く難行を行する有り。故に聖道の傍に淨土を明かすのみ。道綽の時は末法の始に屬す、聖道は難行にして行するべからざるなり。故に斷斷に之れを捨つ。

『評小栗栖念仏圓通』

既不能行、又何必言捨。

既に行ずる能はず、又何ぞ必ずしも捨つると言はんや。

『念佛圓通統貂』

按既不能行。不捨何為。

『念佛圓通』

安樂集曰。聖道一種今時難證（乃至）大集月藏經曰。我末法時中、億億衆生起行修道、未有一人得者。是道綽之捨聖道者。

『評小栗栖念仏圓通』

此等語句、均是活機。策勵後學之言也。

『念佛圓通統貂』

按大集經中。素無斯文。綽師取五五百年之意。節而引之者也。〈藕益小經要解亦然。文少異。而意全同。〉而其全文引在集第一大門教興所由下。而其前云。若教赴時機。易修易悟。若機教時乖。難修難入。是故正法念經云。行者一心求道時。當觀察時方便。若不得時方便。是名為失。

訳註『念佛圓通』

按ずるに、既に行ずること能はず。捨てずんば何をか為さんや。

『安樂集』に曰はく。「聖道的一種は今の時證し難し。（乃至）『大集月藏經』に曰はく。我が末法の時の中に、億億の衆生、行を起こし道を修せんに、未だ一人も得る者有らず」と。是れ道綽の聖道を捨つるなり。

此等の語句、均しく是れ機を活す。後學を策勵するの言なり。

按ずるに、『大集經』の中に素より斯の文無し。綽師五五百年の意を取り、節して之れを引くなり。〈藕益⁸⁵（二五九九―一六五五）の『小經要解』も亦然り⁸⁶。文少し異なるも意は全同なり〉而るに其の全文引くは、『集』の「第一大門・教興所由」の下に在り。而るに其の前に云はく。「若し教、時機に赴けば修し易く悟り易し。若し機と教と時と乖けば、修し難く入り難し。是の故に『正法念經』に云はく。「行者一心に道を求めん時、

不名利。何者如攢濕木。以求火。火不可得。非時故。若折乾薪以覓水。水不可得。無智故。此等諸文前後相照。則綽公本意、在論機教應否也、明矣。何策勵之語乎。高見唯在聖道、而不願淨土。故有斯說。更回顧一番、通看聖淨以領佛意則幸。

『念佛圓通』

又曰。當今末法是五濁惡世。唯有淨土一門、可通入路。是道綽之取淨土者取捨之義。皓照兩瞳、非盲者必見之。欲開一宗風動天下者、必須鮮明其旗幟而令知其方針。

『評小栗栖念仏圓通』

不顧經意之所在、只圖動人之觀聽欲出新奇。其途甚多。支那境內、且有數十種而未已也。

當に時と方便とを觀察すべし。若し時を得ざれば、方便無し。是れを名づけて失と爲す。利と名づけず。何とならば、濕へる木を攢りて以て火を求めんに火は得べからず、時に非らざるが故に。若し乾きたる薪を折りて以て水を覓めんに、水は得べからず、智無きが如しの故に」と。此れ等の諸文、前後相ひ照らす。則ち綽公の本意は機と教の應否を論ずるに在るなり、明らかなり。何ぞ策勵の語ならんや。高見は唯だ聖道に在るのみにして淨土を願はず。故に斯の說有り。更に一番を回顧し、通じて聖淨を見て、以て佛意を領すれば、則ち幸なり。

又、曰はく。「當今は末法にして、是れ五濁惡世なり。唯だ淨土の一門のみ有りて通入すべき路なり」と。是れ道綽の淨土を取るとは取捨の義なり。兩瞳を皓照するに、盲者に非らざれば必ず之れを見る。一宗を開かんと欲する風動天下の者、必ず鮮明なる其の旗幟を須ひて、其の方針を知らしむ。

經意の所在を顧みず、只だ動人の觀聽を圖りて新奇を出さんと欲す。其の途、甚だ多し。支那の境內、且く数十種有りて未だ已らざるなり。

『念佛圓通統貂』

按綽師豈不顧經意而出新奇者乎。抑二門興廢、既躍然於金口矣。大經流通告弥勒曰。當來之世。經道滅盡。我以慈悲哀愍。特留此經。止住百歲。安樂集第六大門釋之云。末法萬年。衆生滅盡。諸經悉滅。如來悲哀痛燒衆生。特留此經。止住百年。此釋與第三大門引大集經處。前後相應。空師所謂末法萬年後、餘行悉滅特留念佛之意。皎然如燃犀。乃綽師隨經取捨而已。何與後世妖邪之見。可一視哉。

『念佛圓通』

聖道與淨土一而二、二而一、是語可也。善導曰。諸佛所證平等是一。論其所證、則聖道之所證亦真如。而淨土之所證亦真如。是為二而一。然能證之門異也。此土入聖為聖道。他土得證為淨土。是為一而二。善導曰。若以願行來収、非無因緣。雖諸佛所證平等是一、然諸佛誓願各別矣。不可以藥師十二願為弥陀四十八願也。我輩乘弥陀之願力往生淨土、而後證真如法性也。若混淆聖淨朝聖暮淨。二三其操則此土亦不得他土亦不得。沈淪三途耳。

按ずるに、綽師、豈に經意を顧みずして新奇を出さんや。抑も二門の興廢は、既に金口より躍然す。『大經』の流通、弥勒に告げて曰はく。「當來の世に、經道滅盡せんに、我れ慈悲を以て哀愍し、特に此の經を留めて、止住すること百歲せん」と。『安樂集』「第六大門」に之れを釋して云はく。「末法萬年には、衆生滅し盡き、諸經悉く滅せん。如來、痛燒の衆生を悲哀して、特に此の經を留めて止住せんこと百年ならん」と。此の釋は「第三大門」と與に『大集經』を引く處なり。前後相應す。空師の謂ふ所、末法萬年の後、餘行悉く滅し、特に念佛を留むるの意なり。皎然として燃犀の如し。乃ち綽師は經の取捨に隨ふのみ。何ぞ後世に妖邪の見を與ふるや。一視すべきや。

聖道と淨土と一にして二、二にして一、是の語は可なり。善導曰はく。「諸佛の所證は平等にして是れ一なり」と。其の證する所を論ずれば、則ち聖道の證する所も亦真如にして、淨土の證する所も亦真如なり。是れ二にして一と為す。然れども能證の門は異なるなり。此土に聖に入るを聖道と為す。他土に證を得るを淨土と為す。是れ一にして二と為す。善導曰はく。「若し願行を以て來収すれば、因緣無きに非らず」と。諸佛の證する所は、平等にして是れ一と雖も、然れども諸佛の誓願は各各別なり。藥師の十二願を以て弥陀の四十八願と為すべからず。我輩、弥陀の願力に乘して淨土に往生し、而る後に真如法性を證するなり。若し聖淨を混淆すれば朝は聖なるも暮は淨なり。其の操

を二三すれば、則ち此土も亦得ず、他土も亦得ず。三途に沈淪するのみ。

『評小栗栖念仏圓通』

栖君實未嘗知聖道淨土同別之源語。語以此土入聖為聖道、他土得證為淨土。所知盡於此矣。豈知聖道者十方三世同行之道、娑婆極樂均如是修證。佛說淨土門是防退之法。仗彌陀願力往生西方。永無退緣必至成佛也。是以專修淨土即得圓成聖道門。若唱捨聖道即是捨淨土。蓋淨土由彌陀修聖道而成也。如來善巧方便、或說自身或說他身、或示己事或示他事。而以世俗情見、固執不解欲入佛界不亦難哉。

『念佛圓通統紹』

按聖淨二門之相関。陽駁續紹粗辯之。不復贅焉。高見復以淨土為防退之法。恐未免廬山之一面也。道綽云。問曰。菩提是一。修因亦應不二。何故在此修因向佛果。名為難行。往生淨土。期大菩提。乃名易行道也。答曰。諸大乘經所辨。一切行法。皆有自力他力。自攝他攝。

栖君、實に未だ嘗て聖道・淨土の同別の源語を知らず。此の土の入聖を以て聖道と為し、他土に證を得るを淨土と為すと語れり。知る所は此に盡く。豈に聖道者の十方三世同行の道、娑婆・極樂の均しく是の如く修證するを知らんや。佛の淨土門を説くは、是れ防退の法なり。弥陀の願力に仗して西方に往生す。永く退緣無ければ必ず成佛に至るなり。是れを以て淨土を專修すれば即ち聖道門を圓成することを得る。若し聖道を捨つると唱ふれば即ち是れ淨土を捨つるなり。蓋し淨土の彌陀に由りて聖道を修して成するなり。如來の善巧方便は、或ひは自身に説き、或ひは他身に説く、或ひは己事に示し、或ひは他事に示す。而るに世俗の情見を以て固く執して解せずんば、佛界に入らんと欲するも亦、難からざらんや。

按ずるに、聖淨二門の相関は、『陽駁統紹』に粗ぼ之れを辯ず。復た贅せず。高見は復た淨土を以て防退の法と為す。恐らく未だ廬山の一面を免れざるなり。道綽云はく。「問ふて曰はく。菩提は是れ一なり。修因も亦、應に不二なるべきに、何が故ぞ、此の在りて因を修して佛果に向かふを名づけて難行と為し、淨土に往生して大菩提を期するをば乃ち易行道と名づくるや。答へて曰はく。諸の大乘經に辨ずる所の一切の

《中略》在此起心立五行。願生淨土。此是自力。臨命終時。阿弥陀如来。光臺迎接。遂得往生。即為他力。《安樂集第三大門》此文問以難易二行、答以自他二力。答問相配、則難行是自力。易行是他力也。而自力中有願生淨土之語、何也。蓋有人于此。苦於在此立行之難也。欲生彼土而成之。又有人、專願淨土欲託佛力而成大果。前者雖願淨土、猶未免在聖道難行之範疇焉。後者乃真淨土易行道也。高見唯在前者不及後者。故以防退為往生之要。以聖道為總。欲開淨土於其中、恐未足論廬山之全也。末節如來善巧。說自說他。云々。在良鑒則當然。若病者謂皆是藥也。吐下一齊服去則無。乃掘苗之類乎。故吾儕或聖或淨。各由有緣之一法耳。鸞師云。如似置草引牛。恒繫心槽檻。豈得縱放全無所歸。鄙見如此。書以就正焉。

行法、皆、自力・他力、自攝・他攝有り。《中略》此に在りて心を起こし行を立て淨土に生まれんと願ず。此れは是れ自力なり。命終の時に臨みて、阿弥陀如来、光臺迎接して遂に往生を得るを即ち他力と為す⁹³と。《安樂集》第三大門》此の文、問ふに難易二行を以てし、答ふるに自他二力を以てす。答問相ひ配すれば、則ち難行は是れ自力なり。易行は是れ他力なり。而るに自力の中に願生淨土の語有り、何ん。蓋し此に人有り、此の立行の難在るを苦しむなり。彼の土に生まれんと欲して之れを成ず。又、人有り、専ら淨土を願ひ、佛力に託さんと欲して、大果を成ず。前者は淨土を願ふと雖も、猶ほ未だ聖道に在りて難行の範疇を免れず。後者は乃ち真の淨土の易行道なり。高見は唯だ前者に在り、後者に及ばず。故に防退を以て往生の要と為し、聖道を以て總と為す。淨土を其の中に開かんと欲するも、恐らく未だ廬山の全に足らざるなり。末節の「如來の善巧は自に説き他に説く、云々」と。良鑒在れば則ち當に然るべし。病者の若きは、皆是れ藥と謂ふなり。一齊に吐下するも服して去れば、則ち無し。乃ち掘苗の類ならんや。故に吾が儕は、或ひは聖、或ひは淨なり。各おの有緣の「一法に由るのみ。鸞師曰はく。「草を置きて牛を引くに、恒に心を槽檻に繋ぐ如似し。豈に縱放にして、全く歸する所無きことを得んや」と。鄙見は此の如し。書して以て正に就く。

第三章

『念佛圓通』

居士曰。縱令一生造惡。經文中無此六字。

解曰。余以居士為信道綽。今則以道綽為違教。余不知居士之意在何處。

『評小栗栖念仏圓通』

道綽於願文内加此六字、開後人放肆之門、不可不辨。豈有刻其書而不檢其過耶。即如南嶽大乘止觀引起信論之語、添一惡字。蓮池已舉其錯。敝處刻藕益書甚多、亦時時論其錯處、不能為之廻護也。

『念佛圓通統貂』

按雲棲宗華嚴。故不滿於南岳。未可知也。但其全書未東傳。不能檢之。道綽既有縱令字。何開放縱之門乎。惡人往生觀經下品有明文。誰其疑之。但與第十八願、唯除

居士曰はく。「縱令一生造惡」、經文中、此の六字無し⁽⁹⁶⁾」と。

解して曰はく。余、居士を以て道綽を信ずると為す。今則ち道綽を以て違教と為す。余、居士の意の何處に在るかを知らず。

道綽は願文の内に於いて此の六字を加へ、後人に放肆の門を開く、辨せざるべからず。豈に其の書を刻して其の過を檢せざること有らんや。即ち南嶽（五一五〜五七七）の『大乘止觀』に『起信論』の語を引き、一の「惡」の字を添へるが如し。⁽⁹⁷⁾蓮池⁽⁹⁸⁾（一五三〜一六一五）、已に其の錯を舉ぐ。敝處の刻、藕益の書は甚だ多し。亦、時時に其の錯處を論ず。之の廻護を爲す能はざるなり。

按ずるに、雲棲の宗は華嚴、故に南岳に満ちずして、未だ知るべからざるなり。但だ其の全書は未だ東傳せず、之れを檢すること能はず。道綽既に「縱令」の字有り。何ぞ放縱の門を開かんや。惡人往生は、『觀經』下品に明文として有り。誰か其れ之れを疑

逆謗相違。是以古人通之。甚勞矣。

鸞師論註以謗罪有無會之。善導散善義約未造已造通之。懷感群疑論。憬興大經贊。亦列多說。善導法事讚又曰。謗法闡提。廻心皆往。說得簡約。由是觀之逆謗之往生、釋迦既開於王宮中矣。蓋彌陀智願海、佛與佛唯知之。而其言如彼。惡人往生何妨。故据觀經而回看大經。則雖加六字、何不可之有。綽公非違經也。不有綽公則佛之悲懷、不顯于末季也。遵綽公、則所以遵經也。

『念佛圓通』

道綽以觀經下下品釋大經第十八願也。是道綽之為萬歲。開凡夫往生之大道者、大經十方衆生之言、不知何等衆生。道綽以為下下品之機。大經十念之言不知其心念語念。道綽以為称念。是道綽之為天下後世。彰弥陀願王之本意也。居士之欲削去者、非閉塞凡夫往生之大道者乎。我輩起惡造罪暴風駛雨。微此道綽之釋、則永劫喪出離之大益。蓋居士以聖道自居而見淨土之書故、為此薄情之言。

ふや。但だ、第十八願と「唯除逆謗」と相違せり。是れを以て古人は之れを通ず。甚だ勞なり。

鸞師は『論註』に「謗罪の有無⁹⁹」を以て之れを會す。善導は「散善義」に「未造・已造¹⁰⁰」に約して之れを通ず。懷感（生没年不詳）の『群疑論』、憬興の『大經贊』も、亦多說を列す。善導の『法事讚』に又曰はく。「謗法闡提、廻心すれば皆往く¹⁰¹」と。說の簡約を得たり。是れに由て之れを觀するに、逆謗の往生、釋迦は既に王宮中に於いて開く。蓋し弥陀智願海は、佛と佛と唯だ之れを知る。而るに其の言は彼の如し。惡人往生、何ぞ妨げんや。故に『觀經』に据り、而も回して『大經』を看れば、則ち六字を加ふると雖も、何ぞ不可の有ならんや。綽公は違經に非らざるなり。綽公有らずんば、則ち佛の悲懷、末季に顯れざるなり。綽公を遵ぶは、則ち所以に經を遵ぶなり。

道綽は『觀經』の下下品を以て『大經』第十八願を釋するなり。是れ道綽の萬歲と為す。凡夫往生の大道を開くとは、『大經』の「十方衆生」の言、何等の衆生か知らず。道綽は以て下下品の機と為す。『大經』の「十念」の言、其の心念か語念かを知らず。道綽は以て称念と為す。是れ道綽の天下後世の為なり。弥陀願王の本意を彰すなり。居士の削去せんと欲するは、凡夫往生の大道を閉塞するに非らざらんか。我輩、惡を起し罪を造ること、暴風駛雨なり。此の道綽の釋、微ければ則ち永劫に出離の大益を喪ふ。蓋し居士は聖道を以て自ら居して淨土の書を見るが故に、此の薄情の言を為す。

『評小栗栖念仏圓通』

第十八願末、明言唯除五逆誹謗正法。道綽加六字於願文之中、顯違經意。遵經乎、遵道綽乎。

第十八願の末、「唯除五逆誹謗正法」を明言す。道綽は六字を願文の中に加ふ、顯らかに經意に違ふ。經を遵するか、道綽を遵するか。

第四章

『念佛圓通』

善導曰。衆生起行、口常稱佛、佛即聞之。身常禮敬佛、佛即見之。心常念佛、佛即知之。衆生憶念佛、佛亦憶念衆生。彼此三業不相捨離故名親縁。

善導曰はく。「衆生起行して、口に常に佛を称すれば、佛即ち之れを聞きたまふ。身に常に佛を禮敬すれば、佛即ち之れを見たまふ。心に常に佛を念すれば、佛即ち之れを知りたまふ。衆生、佛を憶念すれば、佛も亦、衆生を憶念したまふ。彼此の三業、相ひ捨離せず、故に親縁と名づく」と。

『評小栗栖念仏圓通』

心常念佛之語與口常稱佛、一耶二耶。

「心常念佛」の語と「口常稱佛」と、一なるや、二なるや。

『念佛圓通統貂』

按云心云口。云念云称。不可謂一。然口從心起。不可謂異。故曰。体一而相二。非一亦非異。

『念佛圓通』

居士曰。此說是比量。屬依他性。

選擇集曰。衆生口不稱佛、佛即不聞之。身不禮佛、佛即不見之。心不念佛、佛即不知之。衆生不憶念佛者、佛不憶念衆生。彼此三業、常相捨離、故名疎行也。

居士曰。如是翻對是世俗見、即是非量屬遍計性。以彼此之界揣度如來十萬億佛土、如何得去。

解曰。居士以善導為比量為依他。以集主為非量為遍計。居士以唯識視淨土門乎。遍計空依圓有。居士以集主之言為龜毛兎角乎。

按ずるに、心と云ひ、口と云ひ、念と云ひ、称と云ひ、一と謂ふべからず。然るに口は心從り起こる。異と謂ふべからず。故に曰はく。「体一にして、相二なり。一に非らず、亦、異に非らず」と。

居士曰はく。「此の説は是れ比量なり。依他性に屬す」と。

『選擇集』に曰はく。「衆生、口に佛を稱せざれば、佛即ち之れを聞こしめさず。身に佛を禮せざれば、佛即ち之れを見そなはさず。心に佛を念ぜざれば、佛即ち之れを知らず。衆生の佛を憶念せざれば、佛衆生を憶念したまはず。彼此の三業、常に相ひ捨離す、故に疎行と名づくるなり」と。

居士曰はく。「是の如き翻對は是れ世俗見、即ち是れ非量にして遍計性に屬す。彼此の界を以て如來十萬億佛土を揣度す、如何が去ることを得ん」と。

解して曰はく。居士は善導を以て比量と為し依他と為す。集主を以て非量と為し遍計と為す。居士は唯識を以て淨土門を視るか。遍計の空、依・圓の有。居士は集主の言を以て龜毛・兎角と為すか。

『評小栗栖念仏圖通』

此中微細分別、心驪氣暴者、何足以知之。

此の中の微細の分別、心驪氣暴は、何ぞ以て之れを知るに足らんや。^⑧

『念佛圓通統貂』

按行者之稱礼念。由佛力而起。故佛能見聞知之。則親疎之翻對、其理易見。而高見非之。無乃為無差之見解為掩乎。

按ずるに、行者の礼念を稱するは、佛力に由て起る。故に佛能く見聞し之れを知る。則ち親疎の翻對、其の理見易し。而れども高見は之れに非らず。無ければ乃ち、無差の見解の為に掩ふと為すか。

『念佛圓通』

善導從表面釋之。是為正釋。集主從裏面釋之。是為翻顯。表釋是則裏釋亦是、裏釋非量則表釋亦非量。集主遍計則善導亦遍計。

善導は表面従り之れを釋す。是れ正釋と為す。集主は裏面従り之れを釋す。是れ翻顯と為す。表釋のはなれば則ち裏釋も亦是なり、裏釋は非量なれば則ち表釋も亦非量なり。集主の遍計なれば則ち善導も亦遍計なり。

順彌陀本願為親行。不順本願為疎行。本願但取三心十念不取雜行也。以不順之行要往生淨土。故不得親近之益也。称禮念之三業、出於憶念之心。故感見聞知之益。称禮念即能感、而見聞知即所感。水月昇降感應道交。非本願之行不能感此益也。

彌陀の本願に順ずるを親行と為す。本願に順ぜざるを疎行と為す。本願は但だ三心・十念を取り、雜行を取らざるなり。不順の行を以て往生淨土を要む。故に親近の益を得ざるなり。称・禮・念の三業、憶念の心を出づ。故に聞知の益を見ず。称・禮・念は即ち能感、而れども見・聞・知は即ち所感なり。水月の昇降は感應道交なり。本願の行に非らずんば、此の益を感じる能はず。

彼此三業、以善導言之則是、而以集主言之則非乎。善

彼此の三業、善導を以て之れを言へば則ち是、而れども集主を以て之れを言へば則ち

導釋其親、集主釋其疎。其揆一也。豈有一去一去之理乎。

第五章

『念佛圓通』

居士曰。佛以無緣大悲攝化衆生。平等普遍、無親疎之別。而言親疎者、屬衆生邊事。若佛因衆生而有親疎、則亦衆生而已矣。烏得稱為佛耶。

解曰。居士單知有平等門。而不知有差別門也。無緣大悲平等普遍、是為平等門。若以願行來収、非無因緣。以三心十念為往生之因。是為差別門。據此差別門開淨土之一門。據此一門逆惡廻心得往生焉。彌陀偈經曰。發願踰諸佛誓二十四章。是彌陀本願之所以超諸佛也。順其本願為親行、不順其本願為疎行也。以水為能感、以月為所感。月豈不照外物哉。然非水則不能感月影也。親疎之行、可以知矣。

非なるか。善導は其の親を釋し、集主は其の疎を釋す。其は揆一なり。豈に一は去り、一は去らざるの理有らんや。

居士曰はく。「佛は無緣の大悲を以て衆生を攝化す。平等にして普遍、親疎の別無し。而るに親疎と言ふは、衆生邊事に屬す。若し佛、衆生に因りて親疎有れば、則ち亦衆生なるのみ。烏んぞ稱して佛と為ることを得んや」と。

解して曰はく。居士は單に平等門の有るを知るのみ。而れども差別門の有るを知らざるなり。無緣の大悲、平等普遍、是れ平等門と為す。若し願行を以て來収すれば、因縁は無きに非らず。三心・十念を以て往生の因と為す。是れ差別門と為す。此の差別門に據り淨土の一門を開く。此の一門に據り、逆惡は廻心して往生を得る。『彌陀偈經』に曰はく。「發願は諸佛を踰へ、二十四章を誓ふ」と。是れ彌陀の本願の諸佛を超ゆる所になり。其の本願に順ずるを親行と為し、其の本願に順ぜざるを疎行と為すなり。水を以て能感と為し、月を以て所感と為す。月、豈に外物を照らさざらんや。然るに水に非らずんば則ち月影を感じる能はざるなり。親疎の行、以て知るべし。

『評小栗栖念仏圖通』

以三心十念之因為差別門、正属衆生邊事。下文水月喻、恰成就我宗。如因衆生而佛有親疏、則佛應無邊衆生之機、應有無邊親疏之別。有心則不普、無心則不差。請細思之。觀經云。光明遍照十方世界念佛衆生、攝取不捨。又云。以無緣慈攝諸衆生。此兩句須善融會。若執定一邊則互相違矣。

水清則月明、水濁則月暗。明暗在水而不在月。是以親疏属衆生邊事。

『念佛圓通統紹』

按諸佛有權實二智。或謂之根本智。後得智。根本實智、照法性之理。諸佛平等無有親疏。後得權智、則照俗諦之事。隨緣差別。豈無親疎乎。衆生之機無邊。佛之應同亦無邊。故或服瓔珞細腰之衣、或現丈六弊垢之身。善導曰。諸佛所證平等是一。若以願行來収。非無因緣。栖師之辯基於此。乃就後得智而言之。然高見但以親疎属衆生邊事。謂佛無親疎。佛無親疎、則但實智足矣。不要權智也。高見復割觀經攝取不捨、以無緣慈兩文。一為差別。一

三心・十念の因を以て差別門と為す。正に衆生邊事に属す。下文の水月の喩、恰も我が宗を成就す。衆生に因りて佛の親疏有れば、則ち佛の無邊衆生の機に應ずるが如きも、應に無邊の親疏の別有るべし。心有れば則ち普からず、心無ければ則ち差はず。請ふ、細に之れを思へ。『觀經』に云はく。「光明、遍く十方世界を照らしたまふ。念佛の衆生をば攝取して捨てたまはず」と。又云はく。「無緣の慈を以て諸の衆生を攝す」と。此の兩句、須く善く融會すべし。若し定んで一邊に執すれば則ち互ひに相違す。水清ければ則ち月明るく、水濁れば則ち月暗し。明暗は水に在りて月に在らず。是れ親疏を以て衆生の邊事に属す。

按ずるに、諸佛に權・實の二智有り。或ひは之れ根本智・後得智と謂ふなり。根本實智は法性の理を照らす。諸佛は平等にして、親疏有ること無し。後得權智は、則ち俗諦の事を照らす。隨緣の差別なり。豈に親疎無からんや。衆生の機は無邊なり。佛の應同も亦無邊なり。故に或ひは瓔珞細腰の衣を服し、或ひは丈六弊垢の身を現す。善導曰はく。「諸佛の所證は、平等にして是れ一なれども、若し願行を以て來し収むるに因縁無きに非らず」と。栖師の辯は基より此に於いてなり。乃ち後得智に就て之れを言ふ。然るに高見は但だ親疎を以て衆生邊事に属す。謂はく、「佛に親疎無し」と。佛に親疎無ければ、則ち但だ實智のみにして足る。權智は要ならざるなり。

為平等。抑平等者、實智所照也。實智照平等時。無生佛無迷悟。既無生佛亦無迷悟。拔苦與樂之想、由何而生。既云慈。為權智上事也明矣。但以無緣冠者。權智本從實智而垂也。水月喻一分。不敢辯也。

第六章

『念佛圓通』

居士曰。兩段引文、皆作下至十聲。可見十念是至淺之行。而真宗教旨反以此行駕九品之上、何也。

解曰。居士之痼疾在焉。集主初引第十八願。次引觀念法門。次引往生禮讚。是以善導釋第十八也。本願之十念、古師以為心念念。善導指定之為十聲稱名。下至者對上盡一形也。上盡一形之念佛亦可往生。下至十聲一聲之念佛亦可往生焉。

諸師以十念為觀念意念之念。弥陀大悲之本願為是閉塞、凡夫入報之大道為是斷絕。善導振力掃攘之、以為十聲之稱名。弥陀之大悲皎然照世。

居士以十念為至淺之行。何其破法之甚。弥陀因位五劫

高見は復た『觀經』の「攝取不捨」を無緣の慈を以て割け、兩文とす。一つは差別と為し、一つは平等と為す。抑も平等とは、實智の所照なり。實智の平等に照らす時、生佛無く、迷悟無し。既に生佛無し、亦迷悟無し。拔苦與樂の想、何に由てか生ぜん。既に慈と云ふ。權智の上事と為ること、明らかなり。但だ無緣を以て冠せば、權智は本、實智従り垂れり。水月は一分を喻ふ。敢へて辯ぜざるなり。

居士曰はく。「兩段の引文、皆「下至十聲」と作る。見るべし、十念は是れ至淺の行なり。而れども『真宗教旨』は反て此の行を以て九品の上に駕す、何ん」と。

解して曰はく。居士は之れ痼疾在り。集主は初に第十八願を引く。次に『觀念法門』を引く。次に『往生禮讚』を引く。是れ善導を以て第十八を釋するなり。本願の十念、古師は以て心念・意念と為す。善導は之れを指定して、十聲の稱名と為す。下至は「上盡一形」に對するなり。上盡一形の念佛も亦往生すべし。下至十聲・一聲の念佛も亦往生すべし。

諸師は十念を以て觀念・意念の念と為す。弥陀大悲の本願は是の為に閉塞し、凡夫入報の大道は是の為に斷絶す。善導は力を振ひて之れを掃攘し、以て十聲の稱名と為す。弥陀の大悲、皎然と世を照らす。

居士、十念を以て至淺の行と為す。何ぞ其の破法の甚しきや。弥陀因位に五劫思惟し

思惟永劫修行、以称名一行爲凡夫人報之因。居士以之爲至淺。是非破毀五劫永劫之大悲哉。

『評小栗栖念仏圓通』

前第三章引道綽釋十方衆生、以爲下下之機、則道綽亦破法矣。

『念佛圓通統貂』

按願文既言十方。五乘咸在。何局下々乎。但爲示本願之勝益言之。猶法華會二乘、而一乘之用益昭也。五乘已攝。何云至淺乎。讚嘆念佛章請參看焉。

『念佛圓通』

居士以十聲爲淺、以九品爲勝。是知聖道而不知淨土也。知自力而不知他力也。知諸行往生而不知念佛往生也。若以聖道論之、則定散勝矣、十聲劣矣。若以淨土論之、則第十八願不以定散爲生因。單以念佛爲生因。善導曰。上來雖說定散兩門之益、望佛本願意在衆生一向專稱彌陀

永劫に修行し、称名の一行を以て凡夫人報の因と爲す。居士、之れを以て至淺と爲す。是れ五劫永劫の大悲を破毀するに非らざらんや。

前の第三章に道綽を引き、「十方衆生」を釋す。以て下下の機と爲せば、則ち道綽も亦、破法なり。

按ずるに、願文は既に「十方」と言ふ。五乗は咸く在り。何ぞ下々に局るや。但だ本願の勝益を示さん爲に之れを言ふなり。猶ほ『法華』の二乗を会して、一乗の用益昭かなるがごとし。五乗は已に攝む。何ぞ至淺と云はんや。「讚嘆念佛章」の參看を請ふ。

居士、十聲を以て淺と爲し、九品を以て勝と爲す。是れ聖道を知りて淨土を知らざるなり。自力を知りて他力を知らざるなり。諸行往生を知りて念佛往生を知らざるなり。若し聖道を以て之れを論すれば、則ち定散は勝なり、十聲は劣なり。若し淨土を以て之れを論すれば、則ち第十八願は定散を以て生因と爲さず。單に念佛を以て生因と爲すのみ。善導曰はく。「上來、定散兩門の益を説くと雖も、佛の本願の意を望まんには、

佛名。以之觀之、序正之定散非彌陀本願。流通之持名、是為本願也。善導又曰。是名正定之業、順彼佛願故。定散九品不順佛願。十聲稱名順佛願也。不順之行不可以往生焉。

『評小栗栖念仏圓通』

誠如此言則善導疏觀經數萬字、大可不必。即佛說三部經法、亦屬虛設。單說第十八願一条足矣。

『念佛圓通統紹』

按一目之網、不可得鳥。故弥陀於第十八之後。更起十九二十之兩願。以逗不能直入十八之機。乃兩願之所以為方便也。弥陀已然。釈迦不當不然於是乎。大經之後、更說觀小二經。猶華嚴之後、說阿含般若諸部、遂歸法華乎。誠如高見則三藏十二部、皆為故紙矣。何啻二經而已哉。

衆生をして一向に専ら彌陀佛の名を稱するに在り」と。之れを以て之れを觀するに、序・正の定散は彌陀の本願に非らず。流通の持名、是れ本願と為すなり。善導又曰はく。「是れ正定の業と名づく、彼の佛願に順ずるが故に」と。定散・九品は佛願に順ぜず。十聲稱名は佛願に順ずるなり。不順の行は以て往生すべからず。

誠に此の言の如くなれば、則ち善導の『疏』の「觀經」の數萬字は大ひに不必なるべし。即ち佛、三部の經法を説くも、亦虚設に属す。單に第十八願一条を説けば足るのみ。

按ずるに、一目の網は鳥を得べからず。故に弥陀第十八の後に於いて、更に一九・二十の兩願を起し、以て直ちに十八に入る能はざる機に逗す。乃ち兩願の方便と為す所になり。弥陀は已に然り。釈迦の不當不然なるは是に於いてか。『大經』の後、更に『觀』『小』の二經を説く。猶ほ『華嚴』の後に阿含・般若の諸部を説き、遂に『法華』に歸することか。誠に高見の如きなれば、則ち三藏・十二部は、皆故紙と為す。何ぞ啻だ二經のみならんや。

『念佛圓通』

居士知有定散之釋、而不知有流通之釋。善導一代之大勲、在流通之釋。

故要知弥陀大悲之本願、須從選擇集入善導。以善導流通之釋入第十八願、則弥陀之本意、瞭然有如觀火矣。

第七章

『念佛圓通』

居士曰。攝取專屬取而不言捨。選擇則有取有捨。語意不同。

解曰。有取必有捨、三尺之童知之。集主以大阿彌陀經之選擇釋大經之攝取。是以異譯釋本經。誰敢非之。居士之單取攝取。豈非抹殺大阿彌陀經選擇文字乎。無替亦太甚矣。

居士、定散の釋有るを知る、而れども流通の釋有るを知らず。善導一代之大勲、流通の釋に在り。

故に弥陀大悲の本願を知ることとを要むれば、須く『選擇集』從り善導に入るべし。善導の流通の釋を以て第十八願に入れば、則ち弥陀の本意、瞭然として火を觀るが如くに有り。

居士曰はく。「攝取は専ら取に屬して捨を言はず。選擇は則ち取有り、捨有り。語意は同じからず」と。

解して曰はく。取有れば必ず捨有り、三尺の童も之れを知る。集主は『大阿彌陀經』の「選擇」を以て『大經』の「攝取」を釋す。是れ異譯を以て本經を釋す。誰か敢て之れを非せん。居士は之れ單に攝取を取るのみ。豈に『大阿彌陀經』の「選擇」の文字を抹殺するに非らざらんや。無替も亦、太甚し。

『評小栗栖念仏圓通』

漢譯・吳譯皆用選擇、魏譯・唐譯皆用攝取。因古之二譯、字句未能妥恰。是以重複譯之、俾成善本。若後譯不能勝於前譯、當時亦無庸費此筆舌矣。細味攝取二字義理深長。請以梵文證之。

『念佛圓通統貂』

按青藍氷水。後譯必勝于前譯。則窺大經者、必不可不由宋譯也。然從上諸師、多從魏譯者何也。蓋梵音多含彼此相燭、以鈎佛意、亦所不可已也。龍舒會輯雖未盡善、四譯並取。亦可以證焉。然高見壹是新之從。不亦太拘乎。

第八章

『念佛圓通』

居士曰。攝取二百一十億諸佛妙土清淨之行、從上文思

訳註『念佛圓通』

漢譯・吳譯は皆「選擇」を用ひ、魏譯・唐譯は皆「攝取」を用ふ。古の二譯に因れば、字句未だ妥恰する能はず。是の重複を以て之れを譯し、善本を成せしむ。若し後譯の前譯に勝る能はずんば、當時も亦、此の筆舌を庸費すること無し。「攝取」の二字を細味せば義理は深長なり。請ふ、梵文を以て之れを證せ。

按ずるに、青藍氷水⁽¹⁶⁾、後譯の必ず前譯より勝れば、則ち『大經』を窺ふ者、必ず宋譯に由らざるべからず。然るに上の諸師に従るに、魏譯⁽¹⁸⁾に従ること多きは何んや。蓋そ梵音多く含み、彼此相ひ燭し、以て佛意を鈎る、亦不可とのみする所ならざらんや。『龍舒』の會輯⁽¹⁹⁾は、未だ善く尽くさざると雖も、四譯並び取る。亦以て證とすべし。然るに高見は壹に是れ新の從なり。亦太だ拘らざらんや。

居士曰はく。「二百一十億の諸佛の妙土、清淨の行を攝取するとは、上文の「思惟攝

惟攝取莊嚴佛國清淨之行語來。法藏比丘當時聞說二百一十億諸佛刹土、一時融入心鏡。殆永劫修行之後、一時發現。非世俗造作須選精美者、作模樣方能成就也。譬如春蠶食葉、大小老嫩一概食盡、及其吐絲變為一色、非復桑葉形樣矣。

解曰。居士之所嫌唯在選擇二字。集主之開一宗、唯在取選擇二字。取者と嫌者相反。不必望居士之隨我也。唯祈居士捨弥陀所捨之行、取弥陀所取之行、而往生真實報土。

『評小栗栖念仏圓通』

彌陀所捨者、無明煩惱也。我亦捨之。彌陀所取者菩提涅槃也。我亦取之。彌陀以三輩九品、攝受衆生。我亦願往生焉。

『念佛圓通統紹』

按設從高見。則四宏誓足矣。法藏何要發四十有八願乎。饒王何必現二百一十億乎。高見論總願而略別願。予甚惑焉。

取莊嚴佛國清淨之行」の語従り來たる。法藏比丘は當時、二百一十億諸佛刹土を説くを聞き、一時に心鏡に融入す。殆ど永劫修行の後、一時に發現す。世俗の造作の須く精美を選び、模様と作り、方に能く成就するに非らざるなり。譬へば、春蠶の葉を食すに、大小・老嫩、一概に食し盡し及び其の絲を吐き變して一色と為す。復た桑葉の形様に非らざるが如し」と。

解して曰はく。居士の嫌ふ所は唯だ「選擇」の二字に在り。集主の一宗を開くは、唯だ「選擇」の二字を取るに在り。取者と嫌者と相ひ反す。必ずしも居士の我れに隨ふを望まざるなり。唯だ祈るは、居士の弥陀の捨てたる所の行を捨て、弥陀の取られたる所の行を取り、而して真實報土に往生せんことを。

弥陀の捨つる所は無明煩惱なり。我れも亦之れを捨つ。弥陀の取る所は菩提涅槃なり。我れも亦之れを取る。弥陀は三輩・九品を以て衆生を攝受す。我れも亦往生を願ふ。

按ずるに、設し高見に従らば、則ち四宏誓を以て足る。法藏、何ぞ要らず四十有八願を發さんや。饒王、何ぞ必ず二百一十億を現せんや。高見は總願を論じて別願を略す。予、甚だ惑ふなり。

『念佛圓通』

大經曰。二百一十億諸佛刹土、天人之善惡、國土之麁妙。大阿彌陀經曰。二百一十億諸佛國土中、諸天人民之善惡、國土之好醜。麁妙之与好醜意同。

既有善惡、須捨其惡取其善。既有麁妙、須捨其麁取妙。故大阿彌陀經曰。選擇心中所願。大經曰。超發無上殊勝之願。五劫思惟在捨其麁惡、而取其善妙。永劫修行之後、其精妙之物集而成弥陀淨土。是弥陀淨土之所以超出於諸佛淨土也。觀經光臺現國、韋提但取弥陀淨土者、出於弥陀選擇之使然也。

『評小栗栖念仏圓通』

法藏比丘見果知因、思惟修行因圓果滿。自然顯現淨妙國土、豈以精妙之物集而成土、如世俗造作之相耶。

『念佛圓通統紹』

按法藏比丘。五劫思惟永劫修行、自然顯現彼妙土。固非世俗造作之相焉。誰有異辭。然其所謂思惟者、實觀見

訳註『念佛圓通』

『大經』に曰はく。「二百一十億の諸佛刹土、天人の善惡、國土の麁妙」^⑪と。『大阿彌陀經』に曰はく。「二百一十億の諸佛國土の中、諸天人民の善惡、國土の好醜」^⑫と。「麁妙」は之れ「好醜」と意同なり。

既に善惡有らば、須く其の惡を捨て其の善を取るべし。既に麁妙有り、須く其の麁を捨て妙を取るべし。故に『大阿彌陀經』に曰はく。「心中の所願を選擇す」^⑬と。『大經』に曰はく。「無上殊勝の願を超發す」^⑭と。五劫思惟に其の麁惡を捨て、其の善妙を取ることに在り。永劫修行の後、其の精妙の物を集して弥陀淨土を成ず。是れ弥陀淨土の諸佛の淨土に超出する所以なり。『觀經』の「光臺現國」^⑮、韋提の但だ弥陀の淨土を取るは、弥陀選擇の然らしむるを出すなり。

法藏比丘は果を見て因を知る、思惟・修行し、因は圓にして果は滿つ。自然に淨妙の國土を顯現す、豈に精妙の物を以て集めて土を成ずるに、世俗造作の相の如くならんや。

按ずるに、法藏比丘は五劫に思惟し、永劫修行し自然に彼の妙土を顯現す。固より世俗の造作の相に非らず。誰か異辭有らん。然るに其の謂ふ所の思惟とは、實に二百一十

二百一十億諸佛刹土、人天之善惡、國土之麤妙矣。非思所以成之則何為。既云善云妙。云惡云麤。選擇之義自在。不待照古譯也。栖師文中精妙之物云々。物字稍粗故。高明有此疑。然汎爾之言。略其言、求其意而可。

『念佛圓通』

春蠶吐絲之譬、亦不外於風流人之假想也。大經曰。其心寂靜、志無所着。菩薩以無着之心、作無選擇之選擇。豈有物可擬乎。大經曰。所修佛國、恢廓廣大、超勝獨妙、建立常然、無衰無變、八功德水、七寶樹林。豈一色蠶絲之可擬者耶。

『評小栗栖念仏圓通』

春蠶喻以為不確、復以作文喻之。譬如聡慧之士、讀盡古今書籍、欲作一篇大文章。必由自己胸中流出、絶不蹈襲陳言、方成妙文。若一一採自他書、縱將一切佳句採盡、祇成一片碎錦。豈得稱為妙文。弥陀淨土亦復如是。

億の諸佛刹土、人天の善惡、國土の麤妙を觀見す。思に非らざるが所以に之れを成すれば則ち何と為すや。既に善と云ひ、妙と云ひ、惡と云ひ、麤と云へり。選擇の義は自在にして、古譯を照らすことを待たざるなり。栖師は文中「精妙の物、云々」と。「物」字は稍や粗なるが故に。高明は此の疑ひ有り。然るに汎爾の言なり。其の言を略すに、其の意を求めて可なり。

春蠶の絲を吐くの譬、亦風流人の假想に外ならざるなり。『大經』に曰はく。「其の心寂靜にして、志は所着無し」と。菩薩は無着の心を以て、無選擇の選擇を作す。豈に物の擬るべき有らんや。『大經』に曰はく。「修する所の佛國は、恢廓廣大にして、超勝獨妙なり、建立常然にして、衰無く變無し」と。八功德水、七寶樹林、豈に一色の蠶絲の擬るべからんや。

春蠶の喻は以為らく不確なり。復た作文を以て之れを喻ふ。譬へば聡慧の士の盡く古今の書籍を讀み、一篇の大文章を作さんと欲す。必ず自己の胸中由り流出し、絶へて陳言を蹈襲せず。方に妙文を成ずるが如し。若し一一に自他の書を採るも、縱に一切の佳句を將ひて採盡し、祇だ一片の碎錦を成ず。豈に妙文と為すと稱することを得んや。弥陀の淨土も亦復た是の如し。

『念佛圓通統貂』

按昌黎云。沈浸醲郁。含英咀華。是文家之秘訣也。沈浸醲郁所謂觀見也。含英咀華所謂撰取也。而云英云華去粗就精。乃選擇在中。既讀万卷書、節作一篇文字。不去粗而何妙。弥陀淨土亦復如是。

第九章

『念佛圓通』

居士曰。般若為諸佛母。般若現時、命根意根俱不相應、即證無上忍不但不起淨穢二見、即佛見法見亦不起也。

解曰。集主之言般若者信第一義也。是因行而非般若現時也。六度中般若波羅密是也。初地菩薩以無漏智照真如、尚屬因行。等覺果滿始證真如全體。集主今舉因行。居士為果誤矣。

按ずるに、昌黎^(七六八、八二四)云はく。「醲郁に沈浸し、英を含み華を咀む^(七)」と。是れ文家の秘訣なり。「沈浸醲郁」は所謂觀見なり。「含英咀華」は所謂撰取なり。而るに「英」と云ひ、「華」と云ひ、粗を去りて精に就けり。乃ち、選擇の中に在り。既に万卷の書を読み、一篇の文字を節作す。粗を去らずして何ぞ妙ならん。弥陀淨土も亦復た是の如し。

居士曰はく。「般若は諸佛の母と為す。般若現する時、命根・意根俱に相應せず。即ち無上忍を證すれば、但だ淨穢二見の起こらざるのみならず、即ち佛見・法見も亦起こらざるなり^(七)」と。

解して曰はく。集主の般若と言ふは、第一義を信するなり。是れ因行にして、般若の現する時に非らざるなり。六度の中、般若波羅密是れなり。初地の菩薩の無漏智を以て真如を照らすことすら尚ほ因行に屬す。等覺の果の滿ちて始めて真如全體を證す。集主は今、因行を擧ぐ。居士の果と為すは誤りなり。

『評小栗栖念仏圓通』

以六度中般若波羅密為淺、是全不知般若。亦并不知波羅密。非般若現前不名六度、以其不到彼岸也。支那禪宗古德、專學般若其造詣之深、豈門外漢所能知耶。

『念佛圓通統紹』

按天台曰。六波羅蜜即是菩薩正行之本。法華云。為求菩薩道者。說六波羅蜜。菩薩是因分之名。則六波羅蜜之為因行明矣。其言到彼岸者。可由以到彼岸云耳。乃因中說果也。台邦古德學般若、未到佛地。亦因地耳。益足證其為因行矣。然高見單屬果分。不亦偏乎。

第十章

『念佛圓通』

居士曰。菩提心為因果交徹之心。諸佛極果名為阿耨多

六度中の般若波羅密を以て淺と為す、是れ全く般若を知らず。亦、並び波羅密を知らず。般若の現前するに非らずんば六度と名づけず、其の彼岸に至らざるを以てなり。支那禪宗の古德、専ら般若を學び其の造詣の深きこと、豈に門外漢の能く知る所ならんや。

按ずるに、天台に曰はく。「六波羅蜜は即ち是れ菩薩正行の本なり」と。『法華』に云はく。「菩薩道を求むる者の為に六波羅蜜を説くなり」と。菩薩は是れ因分の名なり。則ち六波羅蜜の因行と為すこと明らかなり。其の彼岸に到ると言ふは、以て由るべし、彼岸に到ると云ふのみ。乃ち因中に果を説くなり。台邦の古德は般若を學び、未だ佛地に到らず。亦因地のみ。益ます證を足るも、其れ因行と為す。然るに高見は單に果分に属すのみ。亦偏ならざらんや。

居士曰はく。「菩提心は因果交徹の心と為す。諸佛の極果を名づけて阿耨多羅三藐三

羅三藐三菩提。此集并菩提心而捨之。不知以何為佛也。

解曰。此集菩提心者因行也。非佛果也。居士以發菩提心為佛果耶、誤矣。

集主之所廢係聖道自力之菩提、而非淨土他力之大菩提心也。明慧摧邪輪罵集主為惡魔者據不知聖淨二門菩提心有差別也。如前已辨。

『評小栗栖念仏圓通』

無因如何得果。以菩提心之正因方能契無上妙果。句義且不能通、何能論佛法。

『念佛圓通統紹』

按高見嘗以菩提心為因果交徹之心。無句義未完乎。菩提是果。心是因。因地是心。上求菩提之果。故名菩提心。菩提之心、依主釋也。又有菩提之心、一分有財釋也。則菩提心者。於因位名之明矣。而菩提心中、有聖道自力之心。有淨土他力之心。栖師既言之。聖道自力之菩提心。雖曰廢之、淨土他力之菩提心猶立。由比心生彼土、而到

菩提と為す。此の『集』は菩提心を弁じて之れを捨つ。何を以て佛と為すかを知らざるなり」と。

解して曰はく。此の『集』の菩提心は因行なり。佛果に非らざるなり。居士は發菩提心を以て佛果と為さんや、誤りなり。

集主の廢する所は聖道自力の菩提に係り、淨土他力の大菩提心に非らざるなり。明慧は『摧邪輪』において集主を罵り惡魔と為すは、聖淨二門の菩提心の差別有るを知らざるに據るなり。前に已に辨ずるが如し。

因無くして如何が果を得んや。菩提心の正因を以て方に能く無上妙果に契ふ。句義すら且つ通ずること能はず、何ぞ能く佛法を論ぜんや。

按ずるに、高見は嘗て菩提心を以て、因果交徹の心と為す。句義の未だ完ぜざるは無からんや。菩提は是れ果なり。心は是れ因なり。因地は是れ心、上求菩提は之れ果なり。故に菩提心と名づく。「菩提の心」は依主釋なり。又、「菩提の心」は一分の有財釋有り。則ち菩提心とは、因位に於いて之れを名づくること、明らかなり。而るに菩提心の中に、聖道自力の心有り。淨土他力の心有り。栖師は既に之れを言ふ。聖道自力の菩提心、之れを廢すると曰ふと雖も、淨土他力の菩提心は猶ほ立つるがごとし。此の心に由て、彼

大菩提。亦因果之理也。何不通之有。

の土に生じて大菩提に到るなり。亦因果の理なり。何ぞ不通の有ならんや。

第十一章

『念佛圓通』

居士曰。以選擇取捨之心、測度彌陀因地。彌陀因地、果如是乎。

居士曰はく。「選擇取捨の心を以て、彌陀の因地を測度す。彌陀の因地は果たして是の如きか」と。

解曰。攝取之与選擇眼目之異。選其麤惡取其善妙。取捨之義赫如畏日。非盲者必見之。彌陀以無着之心、建超世無上之大願。大阿彌陀經曰。諸佛中之王也。光明中之極尊也。以此選擇之本願、感最尊第一之淨土。居士之抹殺此選擇文字者、使弥陀如来不能成就此無上無等無比無倫之淨土也。噫悲哉。

解して曰はく。攝取は之れ選擇と眼目の異なり。其の麤惡を選び其の善妙を取る。取捨の義は赫として畏日の如し。盲者に非らざれば必ず之れを見る。彌陀は無着の心を以て、超世無上の大願を建つ。『大阿彌陀經』に曰はく。「諸佛中の王なり。光明中の極尊なり」と。此の選擇の本願を以て、最尊第一の淨土を感ず。居士の此の「選擇」の文字を抹殺するは、弥陀如来をして此の無上・無等・無比・無倫の淨土を成就すること能はざらしむなり。噫あ、悲しきかな。

第十二章

『念佛圓通』

居士曰。念者心念也。称者口称也。今云。聲即是念、念即是聲、誤矣。觀經之文明明可考。經云。彼人苦逼不遑念佛。善友告言汝。若不能念彼佛者、應称無量壽佛。可見念与称有別也。下文具足十念之念字、是称名之時、一心專精無他念間雜惟有称名之念。十念相續即得往生矣。此人苦極心猛。命根斷時、前後不接金蓮明耀忽然在前。心力佛力皆不思議也。

解曰。念有心念口称之異。古師以十念為心念。善導楷定之為口称。下至十聲之文明矣。下下品不能念彼佛者之念心念也。應称無量壽佛口称也。具足十念之念亦口称也。

『評小栗栖念仏圓通』

何不曰具足十稱而曰十念耶。蓋猛利称名之時、心亦隨之以口攝心也。必欲掃除心念、是障往生之路矣。

居士曰はく。「念は心念なり。称は口称なり。今云はく。聲は即ち是れ念、念は即ち是れ聲とは誤りなり。『觀經』の文は明明にして考ふるべし。『經』に云はく。「彼の人、苦に逼められて念佛に遑あらず。善友、汝に告げて言す。若し彼の佛を念ずる能はずんば、應に無量壽佛と称すべし」と。見るべし、念と称と別に有るなり。下文の「具足十念」の「念」字は、是れ称名の時、一心專精にして他念・間雜無く、惟だ称名の念有るのみ。十念相續すれば即ち往生を得る。此の人、苦極りて心猛し。命根斷する時、前後に接せざるも金蓮は明耀と忽然に前に在り。心力・佛力、皆不思議なり」と。

解して曰はく。念に心念・口称の異有り。古師は十念を以て心念と為す。善導は之れを楷定して口称と為す。「下至十聲」の文、明らかなり。下下品の「不能念彼佛者」の念は心念なり。「應称無量壽佛」は口称なり。「具足十念」の念も亦口称なり。

何ぞ「具足十稱」と曰はずして「十念」と曰ふや。蓋ぞ猛利の称名の時、心も亦之れに隨ひ口を以て心に攝せざらんや。必ず心念を掃除せんと欲するは、是れ往生の路を障ふるなり。

『念佛圓通』

按本宗非必欲掃除心念。只欲示選擇易行之本意耳。故以称釋之。念称相關之義、前節及之。不再贅焉。

按ずるに、本宗は必ずしも心念を掃除せんと欲するに非らず。只だ選擇易行の本意を示さんと欲するのみ。故に称を以て之れを釋す。念・称の相關の義、前節は之れに及ぶ。再贅せず。

『念佛圓通』

以聖道觀之觀念勝矣。以淨土觀之口称勝矣。弥陀本願不以觀念為因、以口称为因。故雖有千金不可入禁門。一片之券可以入禁門。此券也者萬乘之所勅十聲之念佛、法王之所誓。居士其體之。

聖道を以て之れを觀すれば觀念は勝なり。淨土を以て之れを觀すれば口称は勝なり。弥陀の本願は觀念を以て因と為さず、口称を以て因と為す。故に千金有ると雖も禁門に入るべからず。一片の券は以て禁門に入るべし。此の券は萬乘の所勅、十聲の念佛、法王の所誓なり。居士、其れ之れを體とす。

第十三章

『念佛圓通』

居士曰。此段所論一向之言、甚違經意。經中所說菩提心及諸功德、皆是念佛行門。良以一切法入一法、一法攝一切法。方見純雜無礙之妙。即得名為一向專念也。豈必

居士曰はく。「此の段に論する所の「一向」の言、甚だ經の意に違ふ。經中に説く所の菩提心及び諸功德、皆是れ念佛の行門なり。良に一切法を以て一法に入る、一法は一切法に攝す。方に純雜無礙の妙を見る。即ち名づけて一向專念と為すを得るなり。豈に

口誦佛名聲聲不斷、而始謂一向耶。若如此中所說、為廢諸行歸于念佛。而說者即經中有自語相違之過。何以故經文明明一聯說下。絕無廢歸之意也。且着衣吃飯亦是雜行、便利睡眠亦是雜行。必須不食不睡一口氣念到死。方合此集引證一向之言也。佛經何等深妙。而以淺見測之、豈不貽誤後人。

解曰。居士以聖道之見、見淨土門。故作此妄破盲難也。聖道門中、華天以上皆圓融無礙之理也。淨土門不用之。善導曰。指方立相。西方十萬億土有淨土。有阿彌陀佛。以本願名號攝化十方衆生。十方衆生聞其名號信心歡喜。上盡一形、下至十聲一聲以得往生焉。而後證圓融無礙之理。若一混聖淨作一即一切之觀、願生淨土、此土亦不證他土亦不生。至乎進退維谷矣。

集主就一向之言、設廢立助正傍正之義。而取廢立為正是據善導也。善導以專為百生。以雜為千中無一。居士以集主為違教。是以善導為違經也。

居士以着衣吃飯便利睡眠為雜行。如小兒之謔語。豈讀書知字者、可為此謔語乎。善導設解行二學。解門則不妨大小顯密正法外道一切學之也。行門必據有緣之行也。余輩願生淨土必據本願之行、念佛是也。順佛願故百即百生。諸行不順本願故千中無一。

必ずしも口に佛名を誦し聲聲に斷ぜず、而るに始めて一向と謂はんや。若し此の中の所説の如く、諸行を廢して念佛に歸すると為す。而して説かば、即ち經中に自ら語の相違の過有り。何を以の故に、經文は明明一聯に下に説く。廢歸の意は絶へて無し。且つ着衣・吃飯も亦此れ雜行、便利・睡眠も亦此れ雜行なり。必ず須く食はず睡らず、一口に氣念すれば死に至るべし。方に此の『集』引證の一向の言に合ふなり。佛經、何等か深妙なるか。而るに淺見を以て之れを測る、豈に誤て後人に貽さざらんや」と。

解して曰はく。居士は聖道の見を以て淨土門を見る。故に此の妄破・盲難を作すなり。聖道門の中、華・天以上、皆圓融無礙の理を觀するなり。淨土門は之れを用ひず。善導曰はく。「方を指し相を立つ」と。西方十萬億土に淨土有り。阿彌陀佛有り。本願の名號を以て十方の衆生を攝化す。十方の衆生、其の名號を聞き信心歡喜す。上一形を盡し、下十聲一聲に至る、以て往生を得る。而る後、圓融無礙の理を證す。若し一たび聖淨混し、一即一切の觀を作し、淨土に生ぜんと願はば、此土も亦證せず、他土も亦生ぜず。進退は維れ谷まるに至る。

集主は一向の言に就て、廢立・助正・傍正の義を設く。而して廢立を取りて正と為す。是れ善導に據るなり。善導は專を以て百生と為す。雜を以て千中無一と為す。居士は集主を以て違教と為す。是れ善導を以て違經と為すなり。

居士、着衣・吃飯・便利・睡眠を以て雜行と為す。小兒の謔語の如し。豈に書を読み字を知る者、此の謔語を為すべからんや。善導は解行二學を設く。解門は則ち大小・顯密・正法外道の一切、之れを學ぶを妨げざるなり。行門は必ず有緣の行に據るなり。余輩は淨土に生まれんと願ひ、必ず本願の行に據る、念佛是れなり。佛願に順ずるが故に百即百生なり。諸行は本願に順ぜざるが故に千中無一なり。

以是觀之、解門許六度十度内外一切學之也。若以此學廻向淨土。而擬往生之因行則得名雜行也。不擬則不得雜行之名也。我輩旦夕講華天密禪、不是雜行也。是屬解門也。華天密禪之學、猶不名雜行。何況着衣吃飯哉。

聖道之機願生淨土者、以其日別善行廻向之淨土者有矣。誰人以着衣吃飯便利睡眠有廻向之者哉。佛者之口氣、須禁此不祥之語矣。

『評小栗栖念仏圓通』

宗門參禪者、毎云除吃飯便利是雜用心。律中在着衣吃飯睡眠上制戒數十條、何謂佛者不應說。豈不聞粗言及細語、皆歸第一義乎。

『念佛圓通統紹』

按二行章云。依善導和尚。往生行雖多。大分為二。一正行。二雜行。二行之目。就往生因行分之。而其廢立望第十八本願言之。然則雜行者非指著衣吃飯等雜作也。與律文等其趣自別。又粗言細語歸第一義者。涅槃經中語。

是れを以て之れを觀するに、解門は六度・十度・内外一切、之れを學ぶを許すなり。若し此の學を以て淨土に廻向す。而らば往生の因行を擬れば、則ち雜行と名づくるを得るなり。擬らずんば則ち雜行の名を得ざるなり。我輩、旦夕に、華・天・密・禪を講ず、是れ雜行ならざるなり。是れ解門に屬するなり。華・天・密・禪の學、猶ほ雜行と名づけず。何に況んや、着衣・吃飯なるをや。

聖道の機は淨土に生まれんと願ふ者、其の日別の善行を以て之れを淨土に廻向する者有り。誰人か、着衣・吃飯・便利・睡眠を以て、之れを廻向する者有らんや。佛者の口氣、須く此の不祥の語を禁ずべし。

宗門の參禪者、毎に吃飯・便利を除くと云ふ、是れ雜用心なり。律中、着衣・吃飯・睡眠上の制戒、數十條在り。何ぞ佛の謂ふこと、應に説くべからざらんや。豈に粗言及び細語、皆第一義に歸するを聞かざらんや。

按ずるに、「二行章」に云はく。「善導和尚に依るに、往生の行多しと雖も、大に分かちて二と為す。一には正行、二には雜行なり」と。二行の目は往生の因行に就て之れを分かつ。而るに其の廢立とは第十八本願に望みて之れを言ふなり。然れば則ち雜行とは著衣、吃飯等の雜作を指すに非らず。律文等と與に其の趣、自ら別なり。又、粗言・細

蓋為人悉檀也。恐與令不相關。

『評小栗栖念仏圓通』

不祥之語、莫大於違經意。

『念佛圓通統紹』

按墜緒之茫々。獨搜而遠紹。此善導源空諸師所苦心也。
未審高明緣何發斯語。

『念佛圓通』

一向之釋、集主之所發明。如天台於十如立三轉讀相、
玄忠立他力廻向之義也。以此空前絶後之妙解為違經意。
佛祖神明其謂是何。

語の第一義に帰すとは、『涅槃經』中の語、蓋ぞ人悉檀と為さざらん。恐らくは與に相關せざらしむ。

不祥の語、大に經の意に違ふこと莫し。

按ずるに、墜緒の茫々、獨り搜りて遠く紹ぐ。此れ善導、源空、諸師が苦心する所なり。未審し、高明は何を縁じて斯の語を發すか。

一向の釋、集主の發明する所なり。天台の十如に於いて三轉讀相を立て、玄忠の他力廻向の義を立つるが如きなり。此の空前絶後の妙解を以て經意に違ふと為す。佛祖・神明、其れ是れを何と謂はん。

第十四章

『念佛圓通』

居士曰。五逆以下三行解説、若約懺罪猛鈍修證淺深可以九品互通。此中説解第一義發菩提心通上下者、除非中途退墮作諸惡業、臨終廻心。如經文下品中説。如此三行、未免令初心人無所適從。所謂矯亂論議也。

解曰。居士已許修證淺深矣。解第一義發菩提心、豈無淺深差別乎。居士以般若為般若現時。以菩提心為佛果。故嫌惡其通九品也。矯亂論議却在居士之上矣。

『評小栗栖念仏圓通』

發菩提心解第一義、亦通下下之語、拙評已説明。除非中途退墮方落天下。以其退菩提心、失第一義故也。十惡五逆亦通上上者、除非作實相懺、徹證罪性本空、方能超昇上上也。故此互通之義、皆須轉機、轉則失上而趣下、失下而趣上。若不失仍不互、當以經文為正也。台教後人説横説豎、説逆説順、祇逞鋪排之富麗。往生語中有病而不自知耳。

居士曰はく。「五逆以下三行の解説、若し懺罪の猛鈍、修證の淺深に約さば以て九品は互ひに通ずべし。此の中、解第一義・發菩提心の上下に通ずると説くは、中途の退墮に非らず、諸の惡業を作すも、臨終に廻心するを除く。經文の下品の中の説の如し。此の如き三行、未だ初心の人をして適從する所を無さしむるを免れず。所謂、矯亂の論議なり」と。

解して曰はく。居士は已に修證の淺深を許す。解第一義・發菩提心、豈に淺深の差別無からんや。居士、般若を以て般若の現ずる時と為す。菩提心を以て佛果と為す。故に其の九品に通ずるを嫌惡するなり。矯亂の論議、却て居士の上に在り。

發菩提心・解第一義も亦下下の語に通ず。拙評に已に説明す。中途の退墮に非らざるを除き、方に下下に落つるは、其の菩提心を退するを以て第一義を失ふが故なり。十惡五逆も亦上上に通ずるとは、實相の懺を作し、罪性の本空を徹證するに非らざるを除き、方に能く上上に超昇するなり。故に此の互通の義をもつて、皆須く機を轉ずべし。轉ずれば則ち上を失して下に趣き、下を失して上に趣く。若し失せずんば仍ち互はず、當に經文を以て正と為すべし。台教の後人、横を説き豎を説き、逆を説き順を説く、祇だ逞に之の富麗を鋪排す。往生の語の中に病有り、而れども自ら知らざるのみ。

『念佛圓通統貂』

按集主九品相通之義。於行法談之。非獨就轉機論之。乃九品之機、各修九品之行。故八十有一之數生焉。高見單看經文一往之配屬、而不見刻實之別。故有斯說。若更用此意。再閱集文。則必有了然于心目者。

第十五章

『念佛圓通』

居士曰。善導此頌、重日夜精持一心無間。下文得無生忍。入三賢位。皆是證聖道也。

解曰。極樂無為涅槃界者、隨順法性不乖法本。第一義諦妙境界相故。言無為涅槃界隨緣雜善恐難生者、雜行少善根也。少福德也。不可往生焉。故使如來選要法者、五劫思惟選擇念佛一行為往生因。是多善根也。多福德也。順此願故得往生焉。

本宗以隱顯二義見小經。前極樂無為涅槃界者、是隱義也。真實報土無品位皆級。舉往生人、皆證大涅槃與彌陀

訳註『念佛圓通』

按ずるに、集主は九品相通の義なり。行法に於いて之れを談ず。獨り轉機に就て之れを論ずるに非らず。乃ち九品の機、各おの九品の行を修す。故に八十有一の數生ず。高見は單に經文の一往の配屬を見て、刻實の別を見ず。故に斯の說有り。若しは更に此の意を用ふ。再び集文を閱すれば、則ち必ず心目に了然とすること有り。

居士曰はく。「善導の此の頌、日夜を重ねて精持し一心無間なり。下文の「得無生忍、入三賢位」、皆是れ聖道を證するなり」と。

解して曰はく。極樂無為涅槃界とは、法性に隨順して法本に乖かず。第一義諦・妙境界の相の故に。「無為涅槃界、隨緣の雜善、恐らくは生じ難し」と言ふは、雜行は少善根なり。少福德なり。往生すべからず。故に如來をして要法を選ばしむとは、五劫に思惟して念佛一行を選択して往生の因と為す。是れ多善根なり。多福德なり。此の願に順ずるが故に往生を得る。

本宗は隱顯の二義を以て『小經』を見る。前の極樂無為涅槃界とは、是れ隱の義なり。真實報土は品位の皆級無し。往生人を舉げれば、皆大涅槃を證すること彌陀と同じ。不

同矣。證得不退入三賢者是顯義也。浄土中之化土有品位階級。故往生得三賢之階次也。

本宗以信心歡喜之一念、為無生忍。善導曰。因茲喜故、即得無生之忍。亦名喜忍、亦名悟忍、亦名信忍。無生者は佛果也。信喜之一念、信忍必得無生之生。故名無生之忍。善導曰。是十信中忍、非解行已上忍也。十信之忍者、凡夫之信也。非十住十向十地之忍也。十住以上一分證真如也。

第十六章

『念佛圓通』

居士曰。局字大錯。盖佛法雖無量門、而修習者必從一門深入、方得遍通一切佛法。譬如一室四面開門。欲入室者必從一門。若擬從東入。又欲從西、或兼南北、則終無入室之時矣。

解曰。第十八願之生因唯取念佛。觀經之付屬唯取念佛。小經之證誠唯取念佛。局字何錯之有。

一室四門之譬可也。法相三論華嚴天台各從其所信之一

退を得て三賢に入ること證すとは是れ顯の義なり。浄土中の化土は品位階級有り。故に往生して三賢の階次を得るなり。

本宗は信心歡喜の一念を以て、無生忍と為す。善導曰はく。「茲の喜に因るが故に、即ち無生の忍を得る。亦喜忍と名づく、亦悟忍と名づく、亦信忍と名づく」と。無生とは佛果なり。信喜の一念、信忍は必ず無生の生を得る。故に無生の忍と名づく。

善導曰はく。「是れ十信中の忍なり、解行已上の忍に非らず」と。十信の忍とは、凡夫の信なり。十住・十向・十地の忍に非らざるなり。十住以上は一分に真如を證するなり。

居士曰はく。「局」の字大ひに錯れり。盖し佛法は無量の門と雖も、而れども修習する者、必ず一門從り深く入り、方に遍く一切の佛法に通ずることを得る。譬へば、一室四面の門を開くが如し。室に入らんと欲する者は必ず一門に從る。若しくは東從り入らんと擬り、又は西に從らんと欲し、或ひは南北を兼ね、則ち終に入室の時無し」と。

解して曰はく。第十八願の生因は唯だ念佛を取る。『觀經』の付屬は唯だ念佛を取る。『小經』の證誠は唯だ念佛を取る。「局」の字、何の錯りか之れ有らん。

一室四門の譬は可なり。法相・三論・華嚴・天台、各おの其の信する所の一門に從る。

門。而得入涅槃之真理。已入真理則無復一門四門之差別也。釋迦如也。彌勒如也。一如無二如也。居士已知之。何故嫌從念佛一門、入涅槃之妙境耶。

第十七章

『念佛圓通』

居士曰。菩提心即正覺心也。成正覺方名佛。今重念佛而輕菩提心大違教。

解曰。菩提心之事、如前已辨。

第十八章

『念佛圓通』

居士曰。又念佛有多門。念佛名號、念佛相好、念佛光明、念佛本願、念佛神力、念佛功德、念佛智慧、念佛實相。

而して涅槃の真理に入ることを得る。已に真理に入れば則ち、復た一門四門の差別無し。釋迦も如なり。彌勒も如なり。一如にして二如し。居士、已に之れを知る。何故、念佛の一門從り涅槃の妙境に入るを嫌ふか。

居士曰はく。「菩提心は即ち正覺心なり。正覺を成ずれば方に佛と名づく。今、念佛を重んじて菩提心を輕んずるは大ひに教に違ふ」⁽⁸⁾と。

解して曰はく。菩提心の事、前に已に辨ずるが如し。

居士曰はく。「又、念佛は多門有り。佛の名號を念じ、佛の相好を念じ、佛の光明を念じ、佛の本願を念じ、佛の神力を念じ、佛の功德を念じ、佛の智慧を念じ、佛の實相を念ず」⁽⁹⁾と。

解曰。念佛多門得矣。今以善導觀第十八願之十念、則非心念也。非觀念也。十聲之稱名也。非唯觀經付屬持名、小經亦然。善導曰。世尊說法時將了、慇懃付屬弥陀名是順佛願故。

十念之念口念也。善導曰。望佛本願、意在衆生一向專称弥陀佛名。止觀輔行二之一〈五十二紙〉曰。念法華文字。六祖壇經〈十紙〉曰。世人終日口念般若。不識自性般若。猶如說食不飽。西陽雜俎七〈七紙〉曰。荊州法性寺僧恭惟三十餘年、念金剛經日五十返。以念為唱不違一。北京兒童念大學念中庸念論語念孟子。皆以讀為念也。以十聲釋十念。何疑之有。弥陀因位五劫思惟選取易行之至極。以念佛為入報之因。豈非無蓋大悲哉。善導曰。見有修行起瞋毒。方便破壞競生怨、如此生盲闍提輩、毀滅頓教永沈淪。悲哉。

解して曰はく。念佛は多門にして得るなり。今、善導を以て第十八願の十念を觀ずれば、則ち心念に非らざるなり。觀念に非らざるなり。十聲の稱名なり。唯だ『觀經』は持名を付屬するのみに非らず、『小經』も亦然り。善導曰はく。「世尊の說法、時將に了りなんとす、慇懃に弥陀の名を付屬したまふ」と。是れ佛願に順ずるが故に。

十念の念は口念なり。善導曰はく。「佛の本願の意を望まんに、衆生をして一向に専ら弥陀佛の名を稱するに在り」と。『止觀輔行』二の一〈五十二紙〉に曰はく。「法華文字を念ず」と。『六祖壇經』〈十紙〉に曰はく。「世人、終日に般若を口念す。自性般若を識らず。猶ほ食を説くに飽きざるが如し」と。『西陽雜俎』七〈七紙〉に曰はく。「荊州法性寺の僧恭惟(生没年不詳)は、三十餘年、『金剛經』を念ずること日に五十返なり」と。念を以て唱と為すに一一にも違あらず。北京兒童、『大學』を念じ、『中庸』を念じ、『論語』を念じ、『孟子』を念ず。皆讀むを以て念と為すなり。十聲を以て十念を釋す。何の疑か之れ有らん。弥陀は因位に五劫に思惟し、易行の至極を選取す。念佛を以て入報の因と為す。豈に無蓋の大悲に非らざらんや。善導曰はく。「修行するもの有るを見ては瞋毒を起こし、方便破壞して競ひて怨を生ぜん。此の如きの生盲闍提の輩、頓教を毀滅して永に沈淪す」と。悲しきかな。

第十九章

『念佛圓通』

居士曰。隨念一門即攝一切門、方入十玄法界。若存捨之見、全是凡夫意想与佛界懸遠矣。

解曰。華嚴宗賢首立十玄緣起則天不解之。賢首指金獅子喻之。一即一切獅子也。一切即一金也。舉一全收、一多無礙。是非凡夫之可證也。本宗以之為果地融通矣。念佛而往生、而後證此十玄之妙。

本宗以名號為萬德之所歸。天台之十界三千華嚴之六相十玄、攝之名號中無復遺餘。是謂一即一切。我輩凡夫、非知此一即一切之理而往生也。單以称名感光明之攝取耳。大經曰。其心寂靜志無所着。又曰。設我得佛。又曰。若不生者。法藏菩薩已無我執又無生執。我者無我之我也。生者無生之生也。是約佛邊言之也。

若約衆生則唯信阿弥陀佛救我也。唯信去穢土而生淨土也。此我之与生不妨淨土之往生也。論註下〈十四紙〉曰。言生者是得生者之情耳。又曰。如水上燃火。火猛則水解。水解則火滅。彼下品人雖不知法性無生、但以称佛名力作往生意願生彼土。彼土是無生界見生之火、自然而滅。水

居士曰はく。「隨念一門は即ち一切門を攝し、方に十玄法界に入る。若し取捨の見を存せば、全く是れ凡夫の意想と佛界と懸遠なり」と。

解して曰はく。華嚴宗の賢首は十玄緣起を立つるも則天（六二四く七〇五）は之れを解せず。賢首、金獅子を指し之れを喻ふ。一即一切は獅子なり。一切即一金なり。一を舉げて全て収む、一多は無礙なり。是れ凡夫の證すべきに非らざるなり。本宗は之れを以て果地の融通と為す。念佛して往生し、而して後に此の十玄の妙を證す。

本宗は名號を以て萬德の所歸と為す。天台の十界三千、華嚴の六相十玄、之れ名號中に攝して復た遺餘無し。是れ一即一切と謂ふ。我輩は凡夫なり、此の一即一切の理を知りて往生するに非らざるなり。單に称名を以て光明の攝取を感ずるのみ。

『大經』に曰はく。「其の心寂靜にして、志所着無し」と。又曰はく。「設ひ我れ佛を得んに」と。又曰はく。「若し生まれずんば」と。法藏菩薩は已に我執無く、又、生執無し。「我」とは無我の我なり。「生」とは無生の生なり。是れ佛邊に約して之れを言ふなり。

若し衆生に約すれば、則ち唯だ阿弥陀佛、我れを救ふと信ずるのみなり。唯だ穢土を去りて淨土に生まると信ずるのみなり。此れ我れの生を与へ、淨土の往生を妨げざるなり。『論註』下〈十四紙〉に曰はく。「生と言ふは是れ得生の者の情なるのみ」と。又曰はく。「氷の上に火を燃くに、火猛ければ則ち氷解く。氷解ければ則ち火滅するが如

者衆生貪瞋煩惱中也。火者能生清淨願往生心也。氷解火滅者已往生淨土、則煩惱之氷解而願生之火亦滅得無生之證也。

し。彼の下品の人、法性無生を知らずと雖も、但だ佛名を称する力を以て往生の意を作して、彼の土に生ぜんと願するに、彼の土は是れ無生の界なれば、見生の火、自然に滅するなり」と。氷とは衆生貪瞋煩惱の中なり。火とは能く清淨願往生の心を生ずるなり。氷解け火滅すとは已に淨土に往生すれば、則ち煩惱の氷解け、願生の火も亦滅し、無生の證を得るなり。

第二十章

『念佛圓通』

居士曰。此集專以持名為念佛。而觀相等法均判在念佛之外、非經意也。

解曰。以持名為念佛。如前委辨。

居士曰はく。「此の『集』は専ら持名を以て念佛と為す。而るに觀相等の法は均しく判じて念佛の外に在り。經の意に非らざるなり」と。

解して曰はく。持名を以て念佛と為す。前に委く辨するが如し。

第二十一章

『念佛圓通』

居士曰。觀經所說十六法門、無一不是念佛。此文所判

居士曰はく。『觀經』所說の十六法門は、一として是れ念佛ならざるは無し。此の文

似專局乎持名也。

解曰。然矣。集主以念佛為持名據善導。如前已辨。善導曰。今此觀經以觀佛三昧為宗、亦以念佛三昧為宗。一心廻願往生淨土為體。

本宗解之、用隱顯之義。觀佛三昧為顯宗、念佛三昧為隱宗也。觀經十六觀說定散二善、是為觀佛為宗。流通之持名、是為念佛為宗。

以此隱義開會乎助正則助正定散盡為念佛三昧之文也。

觀無量壽經之名。約之顯義則觀彌陀淨土之依正二報也。約之隱義則觀者信也。如淨土論觀佛本願力之觀。信無量壽經四十八願攝受我也。

一文両義顯則觀佛為宗也。隱則念佛為宗也。亦字示其體別。觀佛之外有念佛故點亦字也。

古師有以念佛為觀佛。故十六觀盡攝於念佛中也。居士依之。本宗依善導、置念佛於定散之外也。

上來二十一章、為居士之來難吐露我輩之赤心畢。

明治三十二年五月三十日起草

六月七日卒業

の判する所は専ら持名に局るに似るなり」と。

解して曰はく。然り。集主は念佛を以て持名と為すこと、善導に據る。前に已に辨するが如し。善導曰はく。「今此の『觀經』は觀佛三昧を以て宗と為す。亦、念佛三昧を以て宗と為す。一心に廻願して淨土に往生するを體と為す」と。

本宗は之れを解するに、隱顯の義を用ふ。觀佛三昧は顯宗と為し、念佛三昧は隱宗と為すなり。『觀經』十六觀は定散二善を説く、是れ「觀佛為宗」と為す。流通の持名、是れ「念佛為宗」と為す。

此の隱の義を以て助正に開會すれば、則ち助正定散、盡く念佛三昧の文と為すなり。

『觀無量壽經』の名、之れ顯の義に約すれば則ち彌陀の淨土の依正二報を觀するなり。之れ隱の義に約すれば則ち觀とは信なり。『淨土論』の觀佛本願力の觀の如し。『無量壽經』の四十八願の我れを攝受するを信するなり。

一文の両義、顯は則ち「觀佛為宗」なり。隱は則ち「念佛為宗」なり。「亦」の字は其の體別なることを示す。觀佛の外に念佛有るが故に、「亦」の字に點するなり。

古師、念佛を以て觀佛と為す有り。故に十六觀盡く念佛の中に攝むるなり。居士は之れに依る。本宗は善導に依り、念佛を定散の外に置くなり。

上來二十一章、居士の來難の為に我輩の赤心を吐露し畢る。

明治三十二年五月三十日起草

六月七日卒業

『念佛圓通統紹』附

二篇俱は簡易精到、況其用語穩妥。以便彼教樂溫良恭讓。半作此苦心真振張樂門者。多謝多謝。

舜台複批。

二篇俱に是れ簡易にして精到なり。況んや其の用語の穩妥なるをや。便を以て彼は樂を教ふ、溫良恭讓なり。半ば此れ苦心を作すも、真に樂門を振張する者なり。多謝なり、多謝なり。

舜台⁽⁸⁸⁾(一八四二―一九三二) 複た批す。

與楊仁山居士書

(『念佛圓通統紹』附)

仁山楊先生執事。龍舟海東之小衲也。才疎根劣道識殊貧、固非可與海外名流言者也。況於齒德並高、執事其人者乎。然執事儒釋兼通之學、忘身為法之功。側聞而私慕者久矣。

前年得大著陰符發隱而讀之、深欣道緣不疎。客歲道友一柳子從江南還、問無恙外談先及執事。柳子曰。仁翁今之淨名也。慧眼高邁竭力護教、刻經之業、其功過半者皆仁翁之力也。

仁翁嘗讀真宗教旨及選擇集、懷疑處一一箋記。香頂老師為之辯。仁翁見而喜之、更有所問、而頂師偶四大失和、

仁山楊先生執事、龍舟⁽⁸⁹⁾(一八六一―一九三二)は海東の小衲なり。才は疎か、根は劣にして、道識は殊に貧しく、固より海外に名の流言を與ふるべき者に非らざるなり。況や齒德並び高く、執事其の人に於いてをや。然るに執事は儒釋兼通の學、身を忘れ法の功を為す。側聞して私に慕ふ者久し。

前年、大著『陰符發隱』⁽⁹⁰⁾を得て、之れを讀み、深き道緣の疎ならざるを欣ぶ。客歳の道友、一柳子⁽⁹¹⁾(一八七五―一九三八)、江南從り還りて恙無きを問ひ、談の先は執事に及ぶ。柳子曰はく。「仁翁は今の淨名⁽⁹²⁾なり。慧眼高邁にして、力を竭して教を護り、刻經の業、其の功の過半は皆、仁翁の力なり」と。

仁翁は嘗て『真宗教旨』及び『選擇集』を讀み、懷疑の處の一一を箋記す。香頂老師は之れの為に辯ず。仁翁は見て之れを喜び、更に問ふ所有り。而れども頂師は偶たま四

未至再辯。竜舟乃於柳子許借陽駁、以下諸篇而讀之、殆有入丈室接默雷之想矣。因憶諸篇隨讀隨評、在執事則殘瀋餘墨雖非勞健腕者、咳唾亦玉、兼通之識、慧眼之高、躍然現於紙墨之外、變通之妙尤不可端倪也。

柳子以淨名擬之洵不誣也。大經阿難白佛言、我不疑斯法但為將來衆生問斯義耳。顧我宗入台邦以來、為日猶淺蜀犬吠日、豈毋其人乎。執事蓋為彼輩欲除其疑惑者、故以陰資名焉辯之。

亦可遂不自量、聊續頂師之辯名曰統貂。稿成示之柳子。柳子曰。執事坦懷、非固所不棄也。郵致以結道緣不亦可乎。乃從其言淨写致之左右。抑竜舟不才不達華音、故文與意多不應者、執事恕之以情勿咎不札則幸。

張居士〈常惺〉前年東遊一次相見。今則矣沈翰林〈善登〉聞失明。護法之翹楚、非執事而誰。乞為法自愛不戢。

大失和し、未だ再び辯するに至らず。竜舟乃ち柳子に『陽駁』を許借し、以下諸篇、之れを讀む。殆ど丈室に入り、默雷の想に接すること有り。憶ひ因るに、諸篇を隨讀・隨評し、執事は則ち殘瀋餘墨の在ると雖も、勞ふこと非らざる健腕の者にして、咳唾も亦、玉なり。兼通の識、慧眼の高、躍然して紙墨の外に現ず。變通の妙、尤も端倪すべからず。

柳子は淨名を以て之れを擬り、洵に誣ひず。『大經』において、阿難は仏に白して言さく。「我れ斯の法を疑はず、但だ將來の衆生の為に斯の義を問ふのみ」と。顧みるに、我が宗の台邦に入りて以來、日は猶ほ浅くして、蜀犬の日に吠ゆるがことを為す、豈に其の人母からんや。執事は蓋し彼輩の為に其の疑惑を除かんと欲して、故に『陰資』を以て名づけ之れを辯ず。

亦、自の量ならざるも、聊か頂師の辯を續するを遂ぐべく、名づけて『統貂』と曰ふ。稿は之の柳子に成示す。柳子曰はく。「執事は坦懷にして葑菲は固より棄てざる所なり。郵致の道縁を結ぶを以て、亦すべからざらんや」と。乃ち其の言に従りて淨写するに之れ左右を致す。抑も、竜舟は不才にして華音に達せず、故に文と意と多くは應ぜず、執事、之れ情を以て咎勿く、不札なるも恕さば則ち幸なり。

張居士〈常惺〉（生没年不詳）は、前年に東遊し一次相見す。今則ち沈翰林〈善登〉（生没年不詳）の失明を聞く。護法の翹楚、執事に非らずんば誰ぞや。乞ふ、法の為に自愛し戢さざらんことを。

明治三十四年十月 日

明治三十四年十月 日

日本京都大谷本願寺大学寮掛錫飛州釋龍舟〈俗姓内記〉頓首。

日本京都大谷本願寺大学寮掛錫飛州釋龍舟〈俗姓は内記〉頓首。

註

- (1) 「南條文雄」：岐阜の美濃大垣に生まれ、一八七一年に福井の憶念寺にて得度。一八八九年文部省より第一号文学博士の称号を受ける。一九〇三年から第二代大谷大学学長を務める。
- (2) 「南轅而北其轍」：車のながえを南に向けているにも関わらず、北に向かうだちを残す。志と行の相反することを用いる。
- (3) 楊仁山『闡教芻言』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一巻・一左)
- (4) 楊仁山『闡教芻言』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一巻・一左)
- (5) 「五伯」：春秋時代の五人の覇者である、斉の桓公、晋の文公、楚の荘公、呉の闔閭、越の勾踐を用いる。
- (6) 「三王」：中国古代(紀元前一七世紀〜紀元前四世紀頃)の夏の禹王、殷の湯王、周の武王(武王と文王を合わせて数える説もある)を用いる。
- (7) 「二帝」：伝説の黄帝の後、古代の黄金期を作った唐堯、虞舜を用いる。
- (8) 楊仁山『闡教芻言』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一巻・二右)
- (9) 楊仁山『闡教芻言』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一巻・二右)
- (10) 楊仁山『闡教芻言』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一巻・二左)
- (11) 楊仁山『闡教芻言』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一巻・三右)
- (12) 「楊仁山居士遺著」には、この文章の前に「勢至自云、我無選擇。源空専主選擇。(勢至自ら云はく、我れに選擇無し。源空は専ら選擇を主とす)」と有る。
- (13) 「選択集」「二行章」(『真聖全』一・九三七)、『観経疏』(『定善義』(『真聖全』一・五二一〜五二二))
- (14) 『首楞嚴經』巻第五『大正』十九・一二八・a・b)
- (15) 「江漢秋陽」：布を長江や漢水で清く濯い、秋の日でさらしてよく乾かせば、これ以上白いものはなく、加えるべきものもない。曾子が

訳註『念佛圓通』

- (16) 「選擇集」「教相章」(『真聖全』一・九三二)
- 一、舉源空上人小傳
- (17) 『法然上人行狀絵図』(勅集御伝、以下『四十八巻伝』と省略)巻一(『法伝全』四)、なお『統紹』に「具さには傳に云はく」として述べられる記述も同様に参照。
- (18) 「観覚」：天台宗の僧。平安後期を生き、比叡山で天台を学び、南都で法相を修める。後に美作菩提寺の院主となる。
- (19) 「源光」：天台宗の僧。法然の最初の師とされる。
- (20) 「観空」：天台宗の僧。平安後期を生き、良忍から円頓戒を受け密教・浄土教を学ぶ。
- (21) 「蔵俊」：法相宗の僧。興福寺の覚晴に師事し、良慶らに法相唯識を学ぶ。
- (22) 「慶雅」：華嚴宗の僧。東大寺尊勝院の良覚に華嚴を学ぶ。
- (23) 「四十八巻伝」巻一〜巻四(『法伝全』五〜十五)
- (24) 「信空」：浄土宗の僧。法蓮房。西大寺の観尊のもとで出家し戒律を学ぶ。後に伝法灌頂を受ける。
- (25) 「四十八巻伝」巻七(『法伝全』三〇〜三一)
- (26) 「観経疏」「散善義」就行立信釈(『真聖全』一・五三八)
- (27) 「四十八巻伝」巻六(『法伝全』二四)
- (28) 「顕真」：天台宗の僧。比叡山に登り明雲、相実から顕密一教を学ぶ。後に後白河天皇の命により天台座主に命じられる。
- (29) 「明遍」：真言宗の僧。東大寺東南院で敏覚、明海に三論・密教を学ぶ。後に法然に浄土教を学ぶ。
- (30) 「証真」：天台宗の僧。隆慧、永弁に恵檀二流の天台教学を学ぶ。
- (31) 「智海」：真言・律兼学僧。有祥、円祐等に密教の野沢両流を受け、鎌倉極楽寺の忍性や憲静に戒律を学ぶ。

- (32) 「貞慶」：法相宗の僧。興福寺において叔父である覚意に法相・律を学ぶ。一二〇五年には法然の専修念仏の停止を朝廷に奏請した。
- (33) 『源空上人私日記』(『真聖全』四・一五九～一六一、『法伝全』七七〇・b～七七一・b)、なお『四十八巻 伝』巻十四(『法伝全』六一～六三)にも大原における論談の記述は存在するが、明遍や貞慶などの名前は見当たらない。
- (34) 『四十八巻 伝』巻八(『法伝全』三五～三六)
- (35) 『往生要集』「序」(『真聖全』一・七二九)
- (36) 『四十八巻 伝』巻十(『法伝全』四三)
- (37) 『四十八巻 伝』巻十一(『法伝全』四九～五〇)
- (38) 『四十八巻 伝』巻八(『法伝全』三六)、ただし『法伝全』の記述は「四月五日」
- (39) 『四十八巻 伝』巻七(『法伝全』三三)
- (40) 『漢語燈録』の中に存する「：『三昧発得記』は『拾遺語燈録』巻上に漢文で収録されている。
- (41) 『三昧発得記』(『真聖全』四・六八七～六八八)
- (42) 『四十八巻 伝』巻三四～三七(『法伝全』二二一～二四四) 出典不明。
- (43) 「祖師」：浄土真宗宗祖、親鸞。明治九年十一月二十八日、勅諡号として「見真大師」を宣下される。
- (44) 「歎異抄」(『真聖全』二・七七四)
- (45) 二、示選擇本願為宗
- (46) 「三信十念」：本文には「三信」と表記されているが、一般的には「三心十念」と示されることが多い。意味は共に「至心・信樂・欲生」の三心を指す。また『観経』に説かれる三心は「さんじん」と読み、『無量寿経』の三心「さんしん」とは区別される。
- (47) 『観経疏』(『定善義』第九真身觀(『真聖全』一・五二二))
- (48) 『法事讃』巻上「前行分・前行道」(『真聖全』一・五七五)
- (49) 『無量寿経』第十八願文(『真聖全』一・九)
- (50) 『観念法門』(「五縁功德分」撰生増上縁(『真聖全』一・六三五))
- (51) 『往生礼讃』(「後序」(『真聖全』一・六八三))
- (52) 「圭峰」：華嚴宗第五祖宗密、唐時代の僧。終南山の圭峰に住していたので、圭峰とも称される。『華嚴経』と禪との一致を試み、教学の根幹は「円覚経」によっている。宗密は『観無量寿経』の九品往生を「是即九品往生、各各須具多種功德方得往生也」(『正統蔵経』巻第七九六八下)と西方極樂往生を述べている。著書に『華嚴経行願品疏鈔』巻六、『円覚経大疏釈義抄』十三巻などがある。
- (53) 『華嚴経行願品疏鈔』巻四に「念佛不同。總有四種。一稱名念二觀像念三觀想念四實相念」(『新編大日本統蔵』七・九一四・a)とある。
- (54) 『観経疏』(「散善義」流通分(『真聖全』一・五五八))
- (55) 『観経疏』(「散善義」就行立信釈(『真聖全』一・五三八)、また原文に見られる「是名正定之業」の部分は略されている。
- (56) 『無量寿経』(『真聖全』一・一七)
- (57) 『大阿弥陀経』(『真聖全』一・一三六)
- (58) 『選釈集』(「本願章」(『真聖全』一・九四三))
- (59) 『選釈集』(「本願章」の「只是男女貴賤、不簡行住坐臥、不論時處諸縁、修之、不難」(『真聖全』一・九四四)の取意文。
- 三ノ一、辨菩提心差別
- (60) 「和語燈」は之れを取る」：例えば、『和語燈』に収録される『七箇条起請文』では、「浄土の菩提心」が述べられる。(『真聖全』四・六〇二)
- (61) 『観経疏』(「散善義」流通分(『真聖全』一・五五八))
- (62) 『往生要集』巻上「正修念仏」の「此有三種。一縁事四弘願。是即衆生縁慈。或復法縁慈也。二縁理四弘。は無縁慈悲也。言縁事四弘者。一衆生無邊誓願度。應念一切衆生悉有佛性。我皆令入無餘涅槃。此心即是饒益有情戒。亦是恩德心。亦是縁因佛性。應身菩提因。二煩惱無邊誓願斷。此是攝律儀戒。亦是斷德心。亦是正因佛性。法身菩提因。三法門無盡誓願知。此是攝善法戒。亦是智德心。

亦是了因佛性。報身菩提因。四無上菩提誓願證。此是願求佛果菩提。謂由具足前三行願。證得三身圓滿菩提。還亦廣度一切衆生。二緣理願者。一切諸法本來寂靜。非有非無非常非斷。不生不滅不垢不淨。一色一香無非中道。生死即涅槃。煩惱即菩提。翻一塵勞門。即是八萬四千諸波羅蜜。無明變爲明。如融氷成水。更非違物。不餘處來。但一念心普皆具足。如如意珠非有實非無實。若謂無者即妄語。若謂有者即邪見。不可以心知。不可以言辯。衆生於此不思議不縛法中。而思想作縛。於無脫法中。而求於脫。是故普於法界一切衆生。起大慈悲興四弘誓。是名順理發心。『真聖全』一・七八三の取意文。

『楊仁山居士遺著』はこの文の後、「彌陀因位捨之一語、不怕拔舌泥犁。何敢出此語。釋迦教中實無此語。勢至教中有之乎。吾不得而知也。彌陀因位捨之一語、不知栖君出於何心。鄙人返己自付、假令刀鋸在前斧鉞在後、以威力逼之。我亦情願粉骨碎身、決不忍出此一言也。〈謹按以上兩條評本未録、茲依手彙補入、編者識〉、(彌陀因位の「捨」の一語、拔舌泥犁を怕れず、何ぞ敢へて此の語を出さんや。釋迦の教中、實に此の語無し。勢至の教中之れ有らんや。吾れ得ずして知るなり。彌陀因位の「捨」の一語、栖君の何の心に於いて出すか知らず。鄙人、己目に返りて付るに、假令ひ刀鋸前に在り、斧鉞後に在り、威力を以て之れに逼る。我れ亦情願して粉骨碎身なるも、決して此の一言を出すを忍ばざるなり。〈謹しんで按ずるに、以上の兩條、評』は本、未録なり。茲に手彙に依り補入す、編者識るす。と続く。

『觀經疏』「玄義分」序題門『真聖全』一・四四三
『觀經疏』「序分義」散善顕行緣『真聖全』一・四九二
慧遠『觀經義疏』末(『大正』三七・一七三、一八六)、この文は見当たらないが、慧遠は『觀經』「九品」の全てに発菩提心が説かれていると主張する。

『觀經疏』「玄義分」和合門『真聖全』一・四五三
『往生要集』卷上「正修念佛」作願門『真聖全』一・七九六
『憬興』：新羅人、唐時代の僧。多くの著作を残す。『觀無量寿經疏』など、浄土教典への注釈も多い。

(70) 「龍興」：現存はしないが、『觀無量寿經疏』などの著作があったとされる。

三ノ二、二雙四重菩提心

(71) 『法華經』「方便品」(『大正』九・九・a)

(72) 『無量寿經』卷上「重誓偈」(『真聖全』一・十三)

(73) 『後出阿弥陀佛偈』に「惟念法比丘、及從世饒王、發願喻諸佛、誓一十四章」(『大正』十二・三六四・b)とある。

(74) 『論註』卷下「善巧摂化章」(『真聖全』一・三三九)

(75) 『安樂集』「第一大門」(『真聖全』一・三八二)、『華嚴經』(『大正』九・七七八・c)からの取意文。

(76) 『安樂集』「第二大門」(『真聖全』一・三八八、三八九)

(77) 『選択集』「念仏付属章」(『真聖全』一・九七七)

四、隨難別解

(78) 「心泉大師」：北方豪。僧名を心泉という。東本願寺の南京の別院の運営を担当する承事。特に南條文雄と楊仁山の書簡の渡しをし、南條から預かった『七祖聖教』を刊行するよう楊仁山に求めた人物。

(79) 『評選択集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十右、左)

(80) 智顗『觀經疏』(『大正』三七・一八八・b)

(81) 『觀經疏』「玄義分」宗旨門(『真聖全』一・四四六)

(82) 『選択集』「教相章」(『真聖全』一・九二九)

(83) 『評選択集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十左)、
『選擇集』「教相章」の一文に対する批判。

(84) 『安樂集』「第三大門」(『真聖全』一・四一〇)、『大集月藏經』卷五(『大正』十三・三三七)の取意文。

(85) 『藕益』：靈峰智旭、明時代の天台の僧侶。藕益は字。株宏の『竹窓隨筆』の影響を受け、教と律と禪の三教同條、儒佛一貫を説いた。著書に『大乘止観法門釋要』四卷、『教觀綱宗』一卷などがある。蓮

宗十三祖の九祖に挙げられている。

- (86) 『仏説阿弥陀經要解』に『大正』三七・三七四・b)「經云。末法中億億人修行。罕有一得道者。惟依念佛得度。嗚呼今正是其時矣」とある。

- (87) 『安樂集』「第一大門」(『真聖全』一・三七八)

- (88) 『安樂集』「第三大門」(『真聖全』一・四一〇)

- (89) 『無量壽經』「流通分」弥勒付属(『真聖全』一・四六)

- (90) 『安樂集』卷下「第六大門」(『真聖全』一・四二七)

- (91) 『往生礼讃』前序(『真聖全』一・六五一)

- (92) 『往生礼讃』前序(『真聖全』一・六五一)

- (93) 『安樂集』卷上「第三大門」(『真聖全』一・四〇六)

- (94) 『撰苗の類』：苗のしんを抜く。転じて、成功を急いで却って功を破ることの譬え。(孟子『公孫丑上』)

- (95) 『安樂集』卷下「第四大門」(『真聖全』一・四一四)

- (96) 『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十左)、

- 『選擇集』「教相章」の一文に対する批判。

- (97) 「一の「悪」の字を添へる」：『起信論』には「三者用大。能生一切世間出世間善因果故」(『大正』三一・五七五・c)とあるが、慧思は「大乘止観法門」において「論云」として「三者用大。能生世間出世間善因果」(『大正』四六・六四八・c)と記している。

- (98) 「蓮池」：明時代の杭州仁和の僧侶。雲棲株宏と呼ぶ。字は仏(德)慧。自ら蓮池と号す。禅教一致を主張し蓮宗十三祖の第八祖に挙げられている。儒佛相資を説き、禅と念仏の通路を主張した。著書に『竹窓三筆』一卷、『阿弥陀經疏鈔』四卷などがある。詳しくは中村薫著『中国華嚴浄土思想の研究』第三章株宏の華嚴浄土義(一五〇頁～二〇二頁)参照。

- (99) 『浄土論註』卷上「八番問答」(『真聖全』一・三〇八～三二〇)

- (100) 『観經疏』「散善義」(『真聖全』一・五五五)

- (101) 『法華讃』卷上(『真聖全』一・五六七)

- (102) 『観經疏』「定善義」第九真身観(『真聖全』一・五二一～五二二)

- (103) 『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十一右)

- (104) 『選擇集』「二行章」の一文に対する批判。

- (105) 『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十一右)

- (106) 『選擇集』「二行章」の一文に対する批判。

- (107) 『楊仁山居士遺著』はこの文の後、「浄土若欠唯識、則彌陀佛法爲有欠矣。集主翻對之語、全是凡夫情調、妙覺位中決無此理、非龜毛兔角而何。(浄土、若し唯識を欠けば、則ち彌陀の佛法、欠有りとなす。集主翻對の語、全て是れ凡夫の情の謂なり。妙覺位の中、決して此の理無し。龜毛・兔角に非らずして何ん)」と続く。

- (108) 『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十一左)

- (109) 『選擇集』「二行章」の一文に対する批判。

- (110) 『後出阿弥陀佛偈』(『大正』十一・三六四・b)、註(73)を参照。

- (111) 『観經』第九真身観(『真聖全』一・五七)

- (112) 『観經』第九真身観(『真聖全』一・五七)

- (113) 『往生礼讃』(『真聖全』一・六五一)

- (114) 『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十二右)

- (115) 『選擇集』「本願章」の一文に対する批判。

- (116) 『観經疏』「散善義」流通分(『真聖全』一・五五八)

- (117) 『観經疏』「散善義」就立立信釈(『真聖全』一・五三八)

- (118) 『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十二左)

- (119) 『選擇集』「本願章」の一文に対する批判。

- (120) 『青藍水』：青は藍より取りて藍より青く、水は水よりできて水より冷たい。(荀子『勸学篇』第一「青取之於藍、而青於藍、水爲之、而寒於水」)

- (121) 『宋譯』：宋、法賢訳(九八〇年頃訳出)『無量壽莊嚴經』三卷。

- (122) 『魏譯』：曹魏、康僧鑑訳(二五二年頃訳出)『無量壽經』二卷。

- (123) 『龍舒の會輯』：王日休『龍舒増廣浄土文』「大藏之中有無量清浄平等覺經。阿彌陀過度人道經。無量壽經。無量壽莊嚴經。四者本爲一經。譯者不同故有四名」(『大正』四七・二五七・b)、ここでの四譯とは①漢訳(支婁迦讖訳、一四七～一八六年頃訳出)『無量清浄平等覺經』四卷、②吳訳(支謙訳、二三三～二二六頃訳出)『阿弥陀三耶三

- 佛薩樓佛壇過度人道經」(『大阿弥陀經』二卷、③魏訳『無量壽經』二卷、④宋訳『無量壽莊嚴經』三卷を指す。
- 〔120〕『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十二左)『選擇集』「本願章」の一文に対する批判。
- 〔121〕『無量壽經』(『真聖全』一・七)
- 〔122〕『大阿弥陀經』(『真聖全』一・一三六)
- 〔123〕『大阿弥陀經』(『真聖全』一・一三六)
- 〔124〕『無量壽經』(『真聖全』一・七)
- 〔125〕『觀經』欣淨緣(『真聖全』一・五〇)
- 〔126〕『無量壽經』(『真聖全』一・七)
- 〔127〕『無量壽經』(『真聖全』一・十四)
- 〔128〕「昌黎」：中唐の代表的詩人である韓愈。自身を昌黎の人と称したので、韓昌黎ともいう。
- 〔129〕「沈浸醲郁、含英咀華」：濃い酒の香り高いものを味わい、花ぶさを口にふくみ、華を咀嚼。転じて、文章を味わい深く香気が浸透する上品なものにたとえる。(韓愈「進学解」)
- 〔130〕『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十三左)『選擇集』「本願章」の一文に対する批判。
- 〔131〕『楊仁山居士遺著』はこの一文の前に「不現何得名般若。〈謹按此句評本末録、茲依手彙補入、編者識〉、現ぜずして何ぞ般若と名づくるを得んや。〈謹しんで按ずるに、此の句は『評』は本、未録なり。茲に手彙に依り補入す、編者識るす。〉とある。
- 〔132〕智顗『法界次第初門』(『大正』四六・六八五・c、六八六・a)
- 〔133〕『法華經』「提婆達多品」(『大正』九・三五・b)
- 〔134〕『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十三左)『選擇集』「本願章」の一文に対する批判。
- 〔135〕『摧邪輪』卷上(『浄土宗全書』八・六九七・b、『日本大藏經』卷四十二宗典部・華嚴宗章疏下・二七五)
- 〔136〕『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十三右)『選擇集』「本願章」の一文に対する批判。
- 〔137〕『大阿弥陀經』(『真聖全』一・一四二)

- 〔138〕『觀經』下品下生(『真聖全』一・六五)
- 〔139〕『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十三左、十四右)、『選擇集』「本願章」の一文に対する批判。
- 〔140〕『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十四左)『選擇集』「三輩章」の一文に対する批判。
- 〔141〕『觀經疏』「定善義」第八像觀(『真聖全』一・五一九)
- 〔142〕『選擇集』「三行章」(『真聖全』一・九三四)
- 〔143〕『北本涅槃經』卷三「壽命品第一之三」(『大正』十二・三八一・c)、『南本涅槃經』卷三「長壽品」(『大正』十二・六一二・b)「汝等於是第一義中應勤精進一心修習。既修習已廣為人。」
- 〔144〕「堅緒之茫々。獨搜而遠紹」：既に地に墜ちた果てしないものを尋ね、ただ独りあまねく搜して遠い昔を受け継ぐ。(韓愈「進学解」)「尋墜緒之茫々、獨旁搜而遠紹」
- 〔145〕『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十五右)『選擇集』「讚歎章」の一文に対する批判。
- 〔146〕『善導』「法事讚」卷下「極樂無爲涅槃界、隨緣雜善惡難生。故使如来選要法、教念彌陀專復專上。七日七夜心無間、長時起行倍皆然。臨終聖衆持華現。身心踊躍坐金蓮。坐時即得無生忍、一念迎將至佛前。法侶將衣競來著。證得不退入三賢」(『真聖全』一・五九七)、法然『選擇集』「多善根章」においてこの偈を引いている。(『真聖全』一・九八三、九八四)
- 〔147〕『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十五左)、『選擇集』「多善根章」の一文に対する批判。
- 〔148〕『觀經疏』「序分義」定善示觀緣(『真聖全』一・四九四、四九五)
- 〔149〕『觀經疏』「序分義」定善示觀緣(『真聖全』一・四九五)
- 〔150〕『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十五左、十六右)、『選擇集』「念佛証誠章」の一文に対する批判。
- 〔151〕『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十六右)、『選擇集』「名号付属章」の一文に対する批判。
- 〔152〕『評選撰集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十六右)、『選擇集』「名号付属章」の一文に対する批判。

- (153) 『法事讃』 卷下「後行分」(『真聖全』一・六〇五)
 (154) 『観経疏』「散善義」流通分(『真聖全』一・五五八)
 (155) 『止観補行』(『大正』四六・一九二・c)
 (156) 『六祖壇經』(『大正』四八・三三〇・a)
 (157) 「恭惟」：恭惟は惟恭の誤り。『宋高僧伝』二五「唐荊州法性寺惟恭伝」(『大正』五〇・八六九・c)
 (158) 段成式『酉陽雜俎』「金剛経鳩異」(『東洋文庫』四〇四『酉陽雜俎』卷五・九二)、また本文に「七」とあるのは続集卷七を意味する。
 (159) 『法事讃』 卷下(『真聖全』一・六〇五)
 (160) 『評選択集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十六右)、
 『選擇集』「名号付属章」の一文に対する批判。
 (161) 『宋高僧伝』 卷五(『大正』五〇・七三二・a)
 (162) 『無量寿経』(『真聖全』一・七)
 (163) 『論註』 卷下「観察体相章」(『真聖全』一・三三七)
 (164) 『論註』 卷下「観察体相章」(『真聖全』一・三三八)
 (165) 『評選択集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十六左)、
 『選擇集』「名号付属章」の一文に対する批判。
 (166) 『評選択集』(『楊仁山居士遺著』第十一冊「闡教編」一卷・十六左)、
 『選擇集』「名号付属章」の一文に対する批判。
 (167) 『観経疏』「玄義分」(『真聖全』一・四四六)
 (168) 「舜台」：石川舜台。当時の東本願寺の宗務総長。中国への布教を熱心に支持した人物。

與楊仁山居士書【附】

- (169) 「龍舟」：内記龍舟。阿部恵水内局で庶務部長を務めた後、内事局長を務める。一九〇二年に擬講、一九二二年に嗣講、一九二二年に講師を追贈される。
 (170) 『陰符發隱』：詳しくは『陰符経発隱』一卷(一八九六年刊)をいう。
 (171) 「二柳子」：一柳知成。十三歳の頃中国に留学しており、十六歳に帰

- 国して東本願寺の録事となっている。名古屋真宗専門学校初代理事兼校長。
 (172) 「浄名」：維摩居士のこと。『注維摩詰経』には「維摩詰所説什曰。維摩詰案言浄名」(『大正』三八・三三七・b)とある。
 (173) 「默雷の想」：『維摩経』 卷中「入不二法門品」(『大正』十四・五五一・c)、文室において、維摩は文殊の問いに黙て答えるが、その黙は雷に譬えられる。
 (174) 「咳唾も亦、玉」：せきやつばまでも珠玉となる。一言一句、詩や文章が美しいことの譬え。(李白『妾薄命』「咳唾成珠」)
 (175) 『無量寿経』 卷上(『真聖全』一・一六)
 (176) 「蜀犬の日に吠ゆ」：太陽を見ることが少ない蜀では、犬は太陽を見ると怪しんで吠える。見識の狭い人が賢人の言葉を疑て批難することを譬える。(柳宗元『答韋中立論師道書』)
 (177) 「葑菲は固より棄てざる所」：葑菲を取る者は根が悪いとしてその葉まで捨てることがある。他は悪くとも一部は役に立つことを譬える。
 (178) 『詩経』「邶風・谷風」(「采葑采菲、無以下体」)
 「張常惺」：連海居士。張連海は、東本願寺の中国布教に対して積極的に協力した。日本の縮刷大蔵経を十三部購入した。後に東本願寺で帰敬式を受け浄土真宗に帰依した人物。詳しくは『東本願寺上海開教六十年史』を参照されたし。
 (179) 「沈翰林」：沈善登。『報恩論』の著者。楊仁山の友人であると共に、南條文雄との交流の中で浄土真宗の中国布教に対して大いに協力した人物。詳しくは前掲『東本願寺上海開教六十年史』を参照されたし。

共同研究者

- 中村 薫 (同朋大学大学院教授)
 飯田真宏 (仏教文化研究所特別研究員)
 伊奈 潔 (仏教文化研究所特別研究員)
 市野智行 (同朋大学大学院後期博士二回生)